



言語活動の充実Q&A

研究・研修スタッフ 共同研究

平成25年3月

島根県教育センター浜田教育センター

はじめに

急速に社会が変化する今、その変化に対応する力が求められています。平成19年に示された学校教育法には、「基礎的・基本的な知識及び技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の学力の三つの要素が示され、そのことを受けて学習指導要領が改訂されました。今回の改訂の中で、とりわけ「言語活動の充実」は、各教科等の思考力・判断力・表現力等の育成につながるものであり、すべての教科等を貫く視点として示されています。

当教育センターが平成23年に行った教員への意識調査では、発言を中心とした言語活動の取組が盛んに行われている一方で、話し合い活動の展開において質的な高まりが十分でないことや、話す・聞く・書く・読むといった4つの言語活動がそれぞれの教科等の思考力・判断力・表現力等の育成に十分つながっていないという実態や、「情報を分析・評価し、論述する」「課題について構想を立てて実践し、評価改善する」という学習活動の課題が明らかになりました。

また、全国学力調査や島根県学力調査などからも、「書く力」に課題があることも浮き彫りになっています。

これらの課題を改善していくためには、「言語活動の充実」が求められる趣旨や背景を十分に理解し、学校全体で組織的に取り組んでいくことが肝要であると考えます。

今回、当教育センターでは、「言語活動の充実」について島根県の実態からうかがえる課題に対する改善策として19の項目に絞り、Q&Aの形式でハンドブックを作成いたしました。各学校の実態に合わせて活用及び実践の手だてとしていただくことで、子どもたちの思考力・判断力・表現力等の育成につながることを願っています。

最後に本書の作成に当たり、多大なご協力をいただいた事例協力校、教育関係機関の方々に、心から感謝申し上げます。

平成25年3月

島根県教育センター浜田教育センター長

三島修治

目 次

- Q. 1 なぜ「言語活動の充実」が求められているのですか。 …… p. 1
- Q. 2 言語の役割を踏まえた言語活動の指導の在り方と留意点について
教えてください。 …… p. 3
- Q. 3 「読む活動」のねらいや活動の種類を教えてください。 …… p. 5
- Q. 4 「書く活動」のねらいや活動の種類を教えてください。 …… p. 6
- Q. 5 「聞く活動」のねらいや活動の種類を教えてください。 …… p. 8
- Q. 6 「話す活動」のねらいや活動の種類を教えてください。 …… p. 9
- Q. 7 「書く活動」は、読む・聞く・話す活動とどのような関係があり
ますか。 …… p. 11
- Q. 8 国語科と各教科等の言語活動の捉え方は同じと考えてよいのです
か。 …… p. 13
- Q. 9 各教科等における言語活動の充実は、どのように進めていけばよ
いのですか。 …… p. 15
- Q. 10 言語活動は学習評価の対象になりますか。 …… p. 17
- Q. 11 指導計画上に言語活動を位置付ける際に、留意することは何です
か。 …… p. 18
- Q. 12 話し合い活動を充実させるポイントは何ですか。 …… p. 19
- Q. 13 教科によっては、言語活動を位置付けることが難しいと感じてい
ます。どのような考え方で取り入れたらよいのですか。 …… p. 21
- Q. 14 書くことの抵抗感を少なくしたり、書く力を高めたりするには、
どのような手立てが考えられますか。 …… p. 25
- Q. 15 思考力・判断力・表現力等を育むためには、どのような学習活動
を行うと効果的ですか。 …… p. 27

- Q. 16 学校全体で「言語活動の充実」に取り組みたいのですが、どのような取組ができますか。…………… p. 31
- Q. 17 保護者や地域の方と連携することができますか。…………… p. 34
- Q. 18 学校の言語環境を充実させたいのですが、どのようなことに配慮するとよいですか。…………… p. 35
- Q. 19 言語活動の充実のために、学校図書館を活用したどのような授業づくりが考えられますか。…………… p. 37

コラム

学習指導要領における言語活動の考え方	…………… p. 2
言葉の重視と体験の充実	…………… p. 4
文や文章以外の「読む活動」	…………… p. 14
「言語」のいろいろ	…………… p. 14
学習評価の目的	…………… p. 17
書いたことを読み解く	…………… p. 23
思考力・判断力・表現力等を育むために	…………… p. 24
何を表現させるのかを大切に	…………… p. 30
教師の積極的な支援を	…………… p. 30

参考資料…………… p. 39

引用文献・参考文献…………… p. 40

Q. 1 なぜ「言語活動の充実」が求められているのですか。

A. 「言語は知的活動（論理や思考）だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある。」の文言が、学習指導要領の基本的な考え方として中央教育審議会答申（平成20年1月）に示されました。これは、「生きる力」の育成を図り、21世紀をたくましく生きていくために「言葉」を教育の根本に据えようというものです。言語の能力を高めることは豊かな心を育む上でも大きな意味があり、各教科等を貫く学習活動として「言語活動の充実」が求められています。

○言語の役割

私たちは生活していく中で多くの言語に触れ用います。言語は社会生活を送る上で必要な手段ともいえるでしょう。本を読む、文章を書くなど、物事を理解したり思考・判断したりするために用いますし、自分の気持ちを相手に伝えるなど人と人をつなぐためのものでもあります。それによって感動したり学習したりもします。

このように、言語には一人一人の知的な活動を促し、豊かな感性や情緒の基盤をつくとともに、人とのコミュニケーション能力を身に付けるという役割があります。このことは「生きる力」を育むことにつながります。

○変化に対応する力～今の子どもたちの課題

知的社会の到来やグローバル化の進展など急速に社会が変化する中、幅広い知識と柔軟な思考に基づいて判断する力やその変化に対応する能力が求められています。

しかし、学力に関する各種調査の結果により、子どもたちの思考力・判断力・表現力等には依然課題があります。また、課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力や多様な観点から考察する能力などの育成・習得が求められているところです。

<島根の子どもたちの課題>

- ・相手や目的に応じて、段落の構成を考えながら文章を書くこと
- ・説明文や資料の内容を読み取り、筋道を立てて考えること【平成24年度県学力調査報告書】

このことを受けて、「島根県学力調査報告書」に各教科における指導の重点を記載しています。



○思考力・判断力・表現力等の育成のために

確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を生かして確実に習得させることと、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育むことの双方が大切です、これらのバランスを重視する必要があります。

このため、それぞれの教科において習得した基礎的・基本的な知識・技能を、観察・実験やレポートの作成、論述など、知識・技能の活用を図る学習活動を充実さ

せたり、総合的な学習の時間のように教科等の枠を超えて各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ったりすることなどにより、思考力・判断力・表現力等を育成することが大切です。また、これらの学習を通じて、その基盤となるのは「言語に関する能力」であり、国語科のみならず、各教科等においてその育成を重視しています。

○各教科等における言語活動の充実の意義

答申（平成20年1月）では、言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心を育む上でも、言語に関する能力を高めていくことが重要であるとしています。このような観点から、言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において言語活動を充実することとしています。

以上のように、言語活動を「いかに」充実させるかという方法論に関心を向けるだけでなく、今回の学習指導要領で「なぜ言語活動の充実を求めているのか」という理念や背景に当たる部分を理解しておくことが、現在行っている授業を見直す足場となることでしょう。



学習指導要領における言語活動の考え方

「学習指導要領 第1章 総則」（小・中学校平成20年3月告示 高等学校平成21年12月告示）では次のような記載があります。（下線部 引用者）

第1 教育課程編成の一般方針

1（前略）学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童（生徒）の発達の段階を考慮して、児童（生徒）の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2 以上のほか、次の事項に配慮するものとする。
(1) 各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。

ここでは、各教科等において思考力・判断力・表現力等を育成する観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語環境を整え、言語活動の充実を図ることが求められています。

Q. 2 言語の役割を踏まえた言語活動の指導の在り方と留意点について教えてください。

A. 言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であるとされています。このため、各教科等において言語活動を充実する際には、このような言語の果たす役割を踏まえた指導を行うことが大切です。

言語の役割を踏まえた言語活動の指導上の留意点を整理すると次のようになります。

○知的活動（論理や思考）に関すること

◇事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること

- ・児童生徒が理解するに当たって、視点をもたせるようにする。
- ・設定した視点に応じて対象から情報を適切に取り出せるようにする。
- ・自分や伝える相手の目的や意図を捉えるようにする。
- ・目的や意図に応じて事実等を整理できるようにする。
- ・構成や表現を工夫しながら伝えられるようにする。

◇事実等を解釈し説明するとともに、自分の考えをもつこと、さらに互いの考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること

- ・事実等を知識や経験と結び付けて解釈し、自分の考えをもたせるようにする。
- ・自分の考えについて、探究的態度をもって意見と根拠、原因と結果などの関係を意識し、説明する際にはそれを明確に示す。
- ・自分の考えと他者の考えの違いを捉え、それらの妥当性や信頼性を吟味したり、異なる視点から検討したりして振り返るようにする。
- ・考えを伝え合う中でいろいろな考えや意見があることに気付くことができるようにする。
- ・考えの根拠や前提条件に違いや特徴があることに気付くことができるようにする。
- ・それぞれの考えの異同を整理して、更に自分の考えや集団の考えを発展させることができるようにする。

○コミュニケーションや感性・情緒に関すること

◇互いの存在についての理解を深め、尊重すること【コミュニケーション】

- ・語彙を豊かにし、表現力を育む。
- ・自分の思いや考えを伝えようとするとともに、相手の思いや考えを理解し尊重できるようにする。
- ・自分の思いや考えの違いを整理しつつ、相手の話を聞き、受け止めることができるようにする。
- ・相手の話に対して、状況に応じた的確に反応できるようにする。

◇感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を互いに伝え合ったりすること

【感性・情緒】

- ・様々な事象に触れさせたり体験させたりするようにする。
- ・感性・情緒に関わる言葉を理解するようにする。
- ・事象や体験等について、より豊かな表現、より論理的で的確な表現を通して互いに交流するようにする。

当教育センターが平成23年に行った教員への意識調査（以降、意識調査という）の結果から、小・中・高等学校ともに児童生徒の言語能力やコミュニケーション能力について、「語彙が少ない」ことを課題と感じているという回答が多く見られました。教科特有の用語などについて、実感を伴って理解させたり、感じたことを具体的な表現を用いて相互に伝え合ったりすることは、コミュニケーション能力や感性・情緒を育むことにもつながっていることを意識して指導することが大切です。



言葉の重視と体験の充実



家庭科では、例えば「ゆでる」「沸騰」などの言葉が、実際に調理したり、目的をもって観察したり、味わったりする実践的・体験的な学習活動を行うことによって、実感を伴う生きた言葉として理解できるようにします。このことは、生活への感性を高めていくことにもつながります。

また、理科では、例えば「昆虫」という言葉について、その言葉や定義を教えるのではなく、身近な虫に触れ、飼育、観察を続けながらその共通点や相違点などを見出すことによって、最終的には「昆虫は頭、胸、腹に分かれていて、あしが6本ある」という科学的概念を形成していきます。

体験的な活動に適切な言語活動を位置付けることで、子どもたちの学びを質的に高めていくことが大切です。

Q. 3 「読む活動」のねらいや活動の種類を教えてください。

A. 「読む」とは、通常、文や文章などの言語を声に出して読み上げたり、目で追いつながら読んだりすることを言います。前者を音読と言ひ、後者を黙読と言ひますが、ねらいに応じて様々な工夫が考えられます。いずれにおいても、「書かれていることを知り理解する」というねらいを踏まえて、各教科等の特質に応じた活動を取り入れていくことが大切になります。

○読むことのねらい

文や文章などの言語を対象に読む場合を考えたときの一般的なねらいは、「書かれていることを知り理解する」ことにあります。そのためには、文字や語彙の意味、文章の読み取り方などについて基礎的な知識や技能を習得している必要があります。知識が不十分なまま読み進めても、内容を正しく理解することはできません。

文章を読むときには、事実と事実の相互関係、事実と感想や意見、解釈などの違いと関係、段落ごとの内容の要旨、段落間の関係などを捉える必要があります。このことによって文章の全体を総合的に理解することができるようになります。

次に、読み取ったことから、登場した人物の心情や場面について想像します。これは、文章の世界を映像化することになり、一人一人のイメージを膨らませ、文章の世界に入り込むことができます。また、読み取った事実から、見えないことを考えたり想像したりすることによって読み取りに深まりが見られるようになります。

このように「読む活動」を通して豊かな感性を育むことは、言語活動の特性と言えます。



○多様な「読む活動」

文や文章を読むときの活動には、主に次のようなものがあります。

- ・黙読…声に出さずに黙って読むこと。
- ・音読…声を出して読むこと。黙読の反対。これには一人で読む場合と複数の人で読む場合がある。
- ・朗読…声を高くして読み上げること。感情を移入するなど読み方に工夫が見られる。通常は一人の場合が多い。
- ・素読…文章の内容を深く理解することは二の次にして、まずは文字だけを追いつながら声を出して読むこと。
- ・速読…できるだけ速く読むこと。これには一定の技術（速読術）が伴う。
- ・熟読…文章の意味をよく考え、意味を味わいながらじっくり読むこと。
- ・味読…内容を十分に味わいながら読むこと。熟読と類似している。
- ・乱読…何の目的意識ももたずに、様々な図書を手当たり次第に読むこと。濫読とも言う。



これらの様々な「読む活動」は、「書く活動」と結び付くことがあります。例えば、読書感想文などはその典型です。また、感想や意見などを友だちに発表したり報告したりする「話す活動」とも関連付けて行われます。【Q. 7 参照】

Q. 4 「書く活動」のねらいや活動の種類を教えてください。

A. 「書く」活動は、日常生活において重要な表現活動の一つで、一般的には文や文章を書き表すことを言います。また、「描く」「画く」（共に「かく・えがく」と読む）という用語があり、絵画やイラスト、地図やグラフ、図面などを描く（画く）活動を指します。さらには音楽の楽譜などに表現する場合には「作曲する」と言われます。これらの活動も、広く「書く活動」として位置付けることができます。書く活動は、書き手の主体的な行為によって成立するため、書こうとする意思が前提にあることが大切になります。



○「書く活動」のねらい

書くという活動は、一部の共同作業を除いて、基本的には個別に行われる表現活動となります。そのためには、次のような役割やねらいがあると言えます。

- ・書くことによって、習得した知識が整理されたり確認されたりする。書く活動には、知識の定着と理解を促すという役割がある。
- ・書く際には、論理的な思考力や適切な判断力が求められ、それらの能力が育成される機会になる。書くときには、手順を考えたり、筋道の論理を明確にしたりする必要がある。
- ・書くことを通して自己を表現することは、自分の考えや立場を明確にすることになる。また、書くことによって物事や事柄の内容を客観的に見ること（客観視）ができるようになる。
- ・一人一人が書いたものは、それぞれの子どもにとって意味があるだけでなく、書いた内容を周囲の人たちと共有することは学びの深まりにつながる。また、公表することによって、周囲の人たちから認められたり評価されたりすることを通して、自己有用感を味わわせる機会になる。授業の場では、書いた内容を一つの教材として活用することができる。

「私は、〇〇のことについて分かったことを図や表を使ってまとめてみたけど、どうかなあ？」



「このまとめ方は、とっても分かりやすく、この部分が特にいいね！」

このように、書くという活動は様々な役割やねらいがあることが分かります。これらのことを理解しておくことは、授業を行う上で大切なこととなります。

○多様な意味をもつ「書く活動」

ひとことで「書く」といっても、この活動には様々な要素が一体的に展開されます。その意味で、「書く」活動は単独に展開される活動というより、総合的な活動であると言えます。【Q. 7 参照】

以下に示すように、「書く」という語句には、様々な意味があります。

◇文字で示すという意味

→「漢字を書く」「筆で文字を書く（書写）」などです。その他に、「日記を書く」「手紙を書く」のように、文章をつくるという意味の書く活動があります。

◇書き著すという意味

→研究論文や小説などのことを指します。これらのほかに、詩、短歌、歌詞、物語、随筆、感想文、意見文、記録文、紀行文、報告文、レポート、論説文など様々な文体（タイプ）のものがあります。

◇その他の意味

→記述する、筆記する、記入する、記録する、記載するなどを指します。まとまった文や文章を書き表す場合には、執筆、著述、著作、起草、寄稿などと言います。また、きれいに書くことを清書する、上手に書くことを達筆、勢いよく書くことを健筆などと言います。

実際の授業では、教科書などの文章や黒板に書かれたことをそのまま書き写す（視写する）活動も行われます。



以上のように、「書く」という語句には様々な意味合いがあります。

○「書く」ための基礎的な技術とは？

国語科の学習指導要領には、学年の発達を踏まえて、「書くこと」に関する指導事項が示されています。そこに示されている「書く」ための基礎的な技術には、次のようなことがあります。

- ・事実と感想、意見などを区別して
- ・目的や意図などに応じて
- ・引用したり、図表やグラフなどを用いたりして
- ・たとえなどの比喻を使って
- ・句読点の打ち方、段落の書き出し方、会話の「 」の使い方
- ・つなぎ言葉（接続詞、副詞）の使い方
- ・「始め・中・終わり」「起・承・転・結」など、文章の構成の仕方

これらは、国語科の授業で体系的に指導されます。他教科等で書く活動を組み入れるときには、国語科で身に付けた書く技術との関連を図りながら指導することが重要になります。

Q. 5 「聞く活動」のねらいや活動の種類を教えてください。

A. 「話す活動」と一体に行われるのが「聞く活動」です。そのため、聞くことと話すことを対で言い表すことができます。学習指導要領にも「話すこと・聞くこと」の内容がまとめて示されています。

聞く活動は、知識や情報を受け入れる立場にある活動であるため、話す活動と比べると受動的（うごめいてく）です。そのため、「聞き取る」という意思が強く働かないと、聞こえていても内容を理解するところまでには至っていないことがあります。このようなことを踏まえ、目的意識をもって主体的に聞く姿勢や態度を育てていくことを心掛けながら指導をしていくことが大切になります。



○「聞く活動」のねらい

「聞く」ということは、友達や先生の意見や知識を収集したり理解したりすることがねらいとなります。また、以下のような役割があると考えられます。

◇聞く態度を育てるという役割！

→聞いている子どもの表情やうなずきやつぶやきなどの態度から、理解や関心の程度を察することができます。聞いている態度は、話している人に見えるため、話す人の意欲や内容などに少なからず影響を与えることがあります。

◇人間関係づくりという役割！

→友だちの話聞くことを通して、違いを認め合ったり、困っている友だちを支えたりすることは、学級内のよりよい人間関係をつくることにつながります。友だちの意見などをていねいに聞くことは、その子どもの人格や人権を尊重することにほかならないからです。

以上のことから、日常生活における「聞く活動」のポイントは、「人の話に耳を傾け、真摯（まじし）に聞くこと」であると言えます。

○多様な「聞く活動」

必要な情報を収集したり、学習を深めたりする授業場面には、次のようなものが考えられます。

◇教師の指導・援助・助言などを聞く場面

→授業では、教師の説明や発問・指示を聞いて学習を進めていくため、説明の内容を理解することが必要となります。

◇友だちとの学び合いの場面

→発表や対話、討論などの活動を通して、友だちから助言を受けたり、交わされた意見を聞き入れたりすることは、学びを深めることにつながります。

これらの活動を充実させることは、様々な人と関わり合う力や態度を養うことにもつながります。

Q. 6 「話す活動」のねらいや活動の種類を教えてください。

A. 「話す活動」は、「書く活動」と同様に子どもたちの主体的な表現活動の一つで、一般的には言語というツールを使って行われます。授業において「話す活動」には、意見、発表、報告、説明、質問、指摘、助言などの発言のほかに、友だちとの間で双方向に行われる対話、会話、討論、議論、ディベート、審議、協議などの話合いがあります。

これらの「話す活動」をどう考え、どのように充実させていくかということが重要なポイントとなります。

○ 「話す活動」のねらい

◇ 「話す」という言葉の捉え方

話すという言葉には、情報の一方的な伝達とか、双方向の意見の交換や交流といったイメージがあります。話し合うとは、伝達や報告や交流にとどまらず、個々の意見などを網の目のように行き交わせながらよりよい考えを生み出すという創造活動としての意味合いがあります。このような学びの場は、学校ならではの学習スタイルと言えます。



このように「話す活動」は、それぞれの集団において人間関係づくりに大きく影響しているということが分かります。授業において話すという活動を取り入れる際には、「話す活動」にどのようなねらいや意味などがあるのかを様々な視点から押さえておくことが大切になるでしょう。

◇ 二つのねらい

話すという活動には、大きく二つのねらいがあります。一つは「情報伝達」で、もう一つは「他者理解」というねらいです。

・ 「情報伝達」としてのねらい

言葉で話して、意思表示する行為は自己表現の一つです。このことによって自己実現を図ることができます。

例えば、周囲の人（たち）に話すことによって、自分の意思を伝えることができ、自分の価値を感じたり、感情が落ち付いたりします。このように、話すという行為は知的な活動であるとともに、感性や情緒の在り方とも深くかかわっていることが分かります。

・ 「他者理解」としてのねらい

話す対象となる他者に言語を介して話すことにより、他者が自分のことをより深く理解できるようになることが特徴として挙げられます。

○多様な「話す活動」

授業において話す行為は、一般に「発言する」などと言われます。これは言葉を発することで、発言権とか発言力、発言者などの用語として使われます。

一言で「発言」といっても授業の場では次のような言い方がなされ、意味合いが使い分けられています。

『説明する』

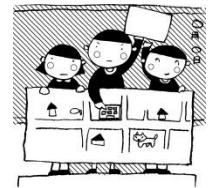
→「事情を説明する」「今の状況を説明する」のように、事柄や現象などの内容や意味することを、相手により分かるように解き明かしていくことを言う。自分自身がより理解していないと、相手が納得できるように十分説明することはできない。特に「なぜなのか」といった理由や背景を説明するときには、根拠を基に論理的に話す能力が求められる。

『報告する』

→あることの遂行状況や結果などについて述べることである。例えば、課題に対して報告するとき大切なことは、課題の把握や分析、現状や状況の把握、課題に対する対処方法、結果の状況や今後の新たな課題など、問題解決のプロセスを知らせることである。事実と私見を区別することもポイントである。

『発表する』

→場と対象を限定して行うときと、不特定多数を対象に行う場合がある。子どもたちが調べたりまとめたりしたことや自分の考えなどを述べることを通常「発表する」と言っている。ある程度の準備の下に行うときと、その場でいきなり意見を表明するときがある。後者のことを「発言する」という場合もある。



これらは、いずれも対象である聞き手を相手に一方向に話すものです。

また、話す活動が双方向に行われる討論や議論、さらには、二人で談話する対談、三人が向かい合って話し合う鼎談ていだんがあります。その他のスタイルとして、以下のものがあります。

『シンポジウム』

→あるテーマについて、異なった側面からそれぞれの意見を述べたり、参会者や司会者からの質問に答えたりするもの。

『パネルディスカッション』

→あるテーマについて、意見の異なる数人が聴衆の前で討論するもの。

いずれのスタイルにおいても、論理的に分かりやすく説明する能力や相手の違った見解を受け入れる受容的な態度などが求められます。

以上のように、「話す活動」のほとんどの場合には対象者がいます。話し合う活動を授業に取り入れる際には、「話す活動」の様々な形態や方法があることを理解するとともに、趣旨やねらいを明確にして、多様な実践を工夫していくことが大切です。

Q. 7 「書く活動」は、読む・聞く・話す活動とどのような関係がありますか。

A. 各種の学力調査に共通の課題点として挙げられていることに「書く力」があります。その背景には、子どもたちの書くことに対する抵抗感の大きさと技術の乏しさがあると言われています。

「書く力」を高める学習活動においては、読む・聞く・話すの各活動との関連を考慮しておくことが不可欠となります。教科等の特質に応じた言語活動を取り入れることで、充実した学習活動を展開していくようにしましょう。

○「書く活動」と「読む活動」

書くためには、そのための知識や情報が必要です。それらは図書や新聞などの文章や図表などを読んで収集することができます。「読む活動」における視点が、書く内容や活動を大きく左右すると言っても過言ではありません。読むことを通して知識や情報を豊富に得ることができるようになると、書く内容も豊かなものになります。一方で、誤った読み方や不十分な読み方をすると、書いた内容そのものに質的な高まりが欠ける場合があります。

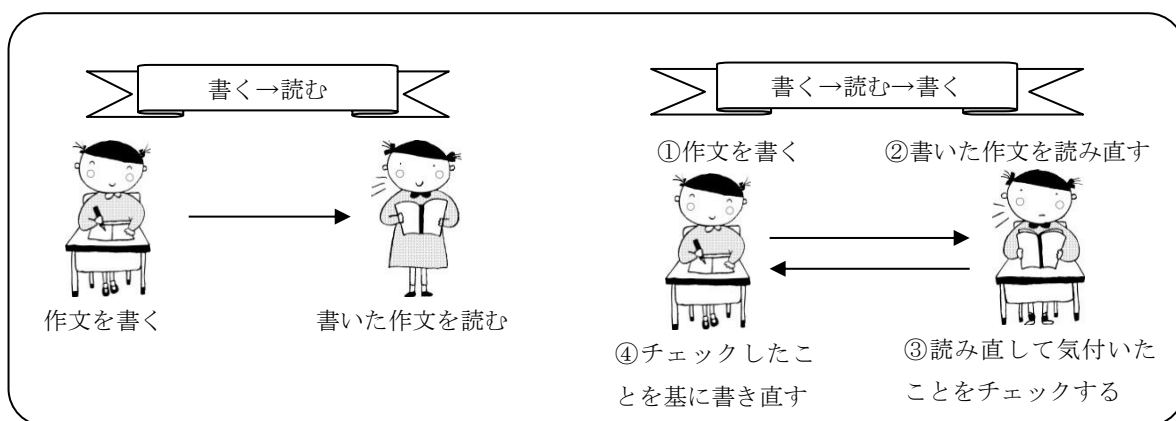
知識や情報は比較的目に見えやすいのに対して、書き手の思いや願いなどは目に見えにくいものです。そうした心の奥にあるものを読み取って、それらを書く場合があります。これには書き手の感性などが反映されます。

これらはいずれも「読む活動→書く活動」という関係です。

これに対して、「書く活動→読む活動」という関係があります。

書いた作文を友だちに発表する場合などは、書いて読む関係の典型と言えます。また、一旦書いたものを読み直すことを「推敲する」と言い、これによって書いたものの内容や質をさらに高めることができます。多くの場合、このあとに再び「書く活動」が行われます。

このように、「書く活動」と「読む活動」は双方向に行われたり、一体的に展開されたりする関係にあると理解することができます。



○「書く活動」と「聞く活動」

人の話を聞くことによって、書く内容を整理していくことがあります。「聞く活動」が基になって「書く活動」が成り立っている関係です。この関係では、聞く側の問題意識や聞き方が書く内容を大きく左右することになります。正確な聞き取り

が行われないと、書いた内容の信頼性が損なわれる結果になります。そのため多くの場合には、聞きながら重要なことなどを書き（メモすること）、聞いたあとにメモを基に書くという活動が行われています。新聞記者が取材し、記事をまとめる場面を考えると分かりやすいでしょう。こうしたスタイルの学習は、社会科や総合的な学習の時間などで展開することができます。

「聞く活動」には、「読む活動」と同様に書くために必要な内容を収集したり、自分の考えを確立したりするという重要な役割があります。両者は主として「聞く活動→書く活動」の関係にあると理解することができます。

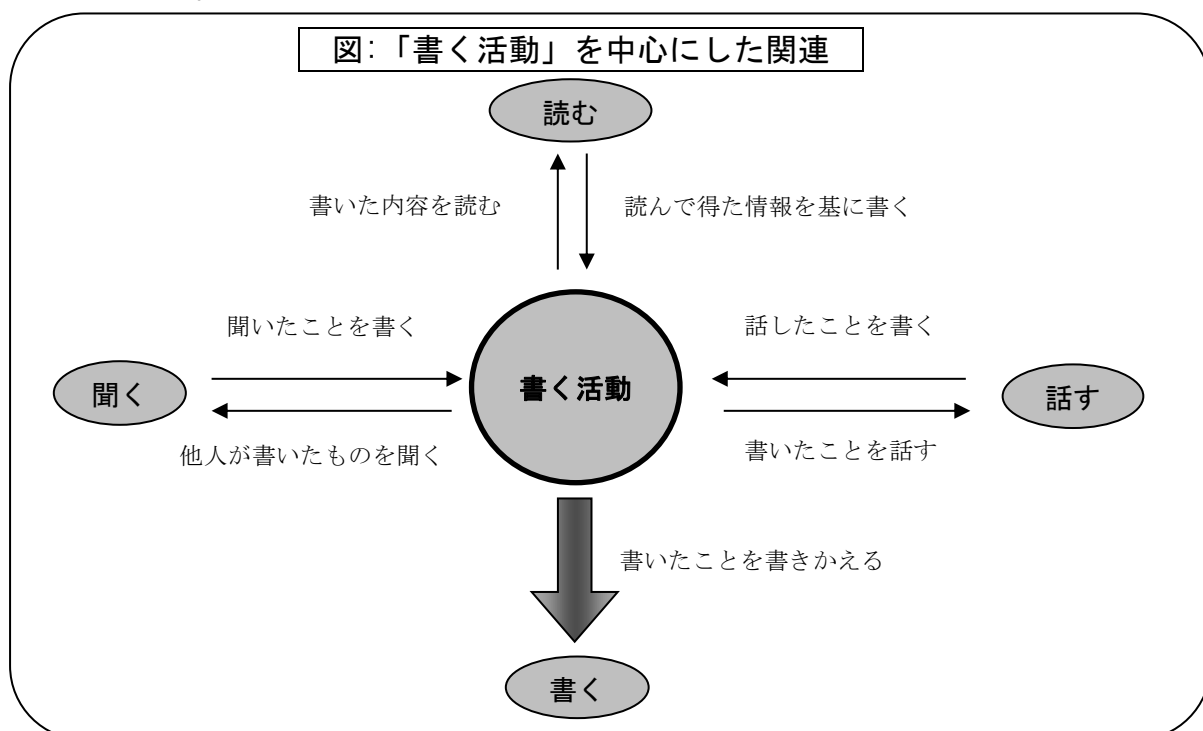
○「書く活動」と「話す活動」

「書く活動」も「話す活動」も共に主として言語による表現活動です。これらは、今日課題になっている表現力を育てるためにも重要な活動であると言えます。「書く活動」は主に言葉や数字などによる文字言語で、「話す活動」は音声言語で行われます。

発表したり説明したり、さらには討論したりするなど、子どもたちに「話す活動」を促すとき、まず自分の考えなどをノートに書かせることがあります。これらは書いて話すという「書く活動→話す活動」の関係です。

調べたことを模造紙にまとめ、それを基に報告したり、あらかじめ作成したメモを見ながら発表したりする活動も「書く活動→話す活動」の関係にあります。

以上のことから、「書く活動」を中心に他の活動との関係を図にすると、次のようになります。



このように、各教科等の指導において「書く活動」を充実させ、子どもたちに書く能力を育てるためには、書くことのみに関心を向けることは望ましくないことが分かります。読む、聞く、話すといった他の言語活動との関係を密接に図った学習活動を組み立てるようにしましょう。

Q. 8 国語科と各教科等の言語活動の捉え方は同じと考えてよいのですか。

A. どちらも言語活動を通して指導事項を指導するという点では同じですが、言語活動で身に付けさせたい力そのものに違いがあります。国語科においては、言語能力そのものを育成することが教科目標なので、「身に付けさせたい言語能力を育成するのにふさわしい言語活動」という視点で言語活動を設定します。それに対して各教科等では、国語科で培った言語能力を生かし、それぞれの教科等の目標を達成するために言語活動を行います。

○国語科における言語活動

例えば中学校国語を例に挙げると、学習指導要領において第1学年の「A 話すこと・聞くこと」の目標（1）には次のようにあります。

目的や場面に応じ、日常生活にかかわることなどについて構成を工夫して話す能力、話し手の意図を考えながら聞く能力、話題や方向をとらえて話し合う能力を身に付けさせるとともに、話したり聞いたりして考えをまとめようとする態度を育てる。
(下線部は引用者による)

このように、国語科においては傍線部のような言語活動が行える能力や態度を育てることそのものが教科の目標になります。

○各教科等における言語活動

例えば、中学校の数学科を例に挙げると、学習指導要領において第1学年の数学的活動について次のような記述があります。

(1) 「A 数と式」、「B 図形」、「C 関数」及び「D 資料の活用」の学習やそれらを相互に関連付けた学習において、次のような数学的活動に取り組む機会を設けるものとする。～(中略)～ウ 数学的な表現を用いて、自分なりに説明し伝え合う活動
(下線部は引用者による)

ここで言語活動として位置付けられるのは、傍線部の中の「説明し伝え合う活動」ですが、「数学的な表現を用いて」とあるように、これは数学的な能力を高めることを目的とした言語活動です。数学では、数学的活動を通して数学的能力を高めることが教科の目標ですので、ここでの「説明し伝え合う」という言語活動はその数学的活動を補完するためのものだと言えます。

数学に限らず、各教科等においては固有の目標があり、言語活動の位置付けは「目標を達成するための手段」です。ですから、言語活動そのものは評価の対象ではありません。あくまでも学習目標に照らし合わせて指導や評価を行うということが大切です。それぞれの教科等のねらいを達成するために効果的な言語活動を、意図的・計画的に設定しましょう。

○国語科の役割

各教科等における言語活動は国語科において既習していることが原則であると考えましょう。つまり、各教科等で行われる言語活動を支えるための言語能力の育成が国語科の役割となります。だからこそ、付けさせたい言語能力（指導事項）を確実に身に付けさせられるような指導の工夫が求められているのです。



文や文章以外の「読む活動」

「読図」という用語があります。これは主に地図に示されたことを読み取る際に使われます。こうした地図やグラフ、図表、図面などを見て事実やその背景などを捉えるときにも「読む」という活動は行われます。「地図を読む」「グラフを読み取る」「図面を読む」などと言います。これらの教材や資料は社会科や算数科、理科、家庭科などの教科で多数登場します。

また、「読譜」という用語もあり、別称として「譜読み」とも言われます。これは歌曲や楽曲の楽譜を読むことです。読譜に関する知識や能力は歌唱や演奏するときには不可欠なものです。

言語活動を各教科等に取り入れるときには、「読む」対象について広く捉えることが大切になってきます。



「言語」のいろいろ

私たちを取り巻く社会には、多くの「言語」が存在します。言語の持つ役割を考えると、文字や話し言葉だけでなく、グラフや地図、音符や絵画等なども「言語」ととらえることができるでしょう。

文字や文章などを「文字言語」や「音声言語」ということに対して、地図、写真、図表、音符、絵画などを「視覚的な伝達手段としての言語」と言ったりもします。また、文字言語や音声言語を「言語系」、それ以外を「非言語系」などと大きく分けて示されることもあります。

自分自身の思考を深めたり、他者と交流して共有化したりするためには、文字・音声言語の働きが不可欠となってきます。「言葉」という共通の言語によって一般化され、他者理解や論理、知的活動が図られるとも言えます。つまり、言語で説明しがたいイメージや感情の世界は、逆に言葉で説明し、分かりやすく他者に伝える行為によって自分自身にとって確実な存在となるのです。



Q. 9 各教科等における言語活動の充実は、どのように進めていけばよいですか。

A. 国語科で培った言語能力を基本に、国語科との連携を図りましょう。各教科等ではねらいを明確にし、特質に応じた言語活動を取り入れます。

○国語科との連携

各教科等で言語活動の充実を図る指導を展開するに当たっては、国語科の役割を確認し、各教科等との連携を図って進めていきます。【Q. 8 参照】

国語科と各教科等との連携については、例えば次のようなことが考えられます。

◇国語科での指導の内容を、全教職員で共有する

- ・話し合い（パネルディスカッション・ディベートなどを含む）の進め方。
- ・意見文や感想文、記録文などの形式。
- ・発言や発表の仕方。
- ・話の聞き方やメモの取り方。

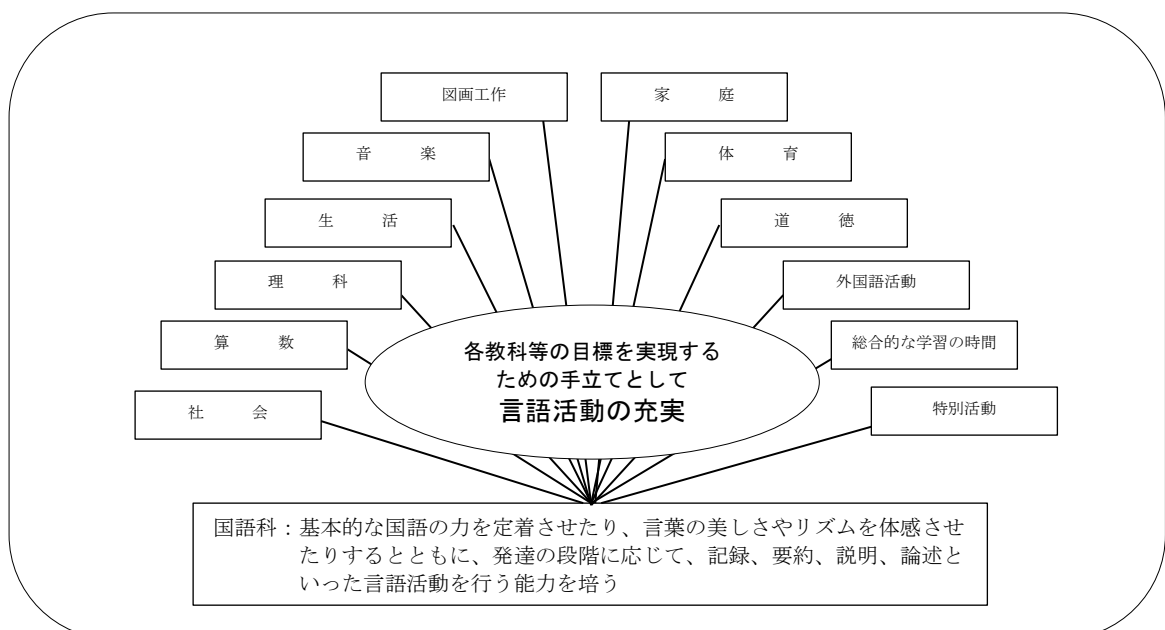
◇国語科で学習した言語活動を各教科等で生かす

- ・記録文の書き方について国語科で学習したことを生かして、理科で観察記録を書く。
- ・レポートの書き方について国語科で学習したことを生かして、総合的な学習の時間にレポートを書く。
- ・話し合いの仕方について国語科で学んだことを生かして、学級活動等で話し合う。

◇各教科等での学習内容を題材として、国語科で言語活動を展開する

- ・社会科で行った調べ学習を、国語科で図表や写真を使って文章にまとめる。

言語活動の観点から国語科と各教科等の関連（小学校）を図で表すと、下記のようになります。【文部科学省資料より】



○各教科等のねらい達成のための手段として、言語活動を位置付ける

言語活動は、各教科等の目標を効果的に達成するための「手段としての言語活動」です。言語活動を通じて、それぞれの教科としてどんな能力を育成するのかといった視点を忘れずに、各教科等のねらいを明確にして、国語科との関連を図りながら、取り組む必要があります。【Q. 8 参照】

○各教科等の特質に応じた言語活動

各教科等においては、国語科で培った能力を基本に、「知的活動の基盤」と「コミュニケーションや感性・情緒の基盤」という言語の役割の観点を意識して学習活動の具現化を図ることが必要です。【Q. 2 参照】

社会科の指導を例にとりて考えてみると

◇調べたことや分かったことを記録すること

教師が示した資料や子ども自身が観察・調査などを通して得た事実や情報をまとめる言語活動を重視します。メモしたりノートにまとめたりする活動を通して、理解を深めさせていきます。

◇分かったことや考えたことを相手に分かるように表現すること

小学校の社会科の観点別学習状況の評価の観点では、「～社会的事象の意味について思考・判断したことを適切に表現している」と示しています。ここで言う「適切に表現している」とは、社会的事象の意味について考えたことを、次のように表現することだと考えられます。

- ・根拠（資料など）や理由を示す。
- ・（既存の経験や知識と結びつけた）自分の言葉によって解釈する。
- ・具体例を挙げ、まとめたりする。
- ・他の子どもの意見と比べたり、つなげたりする。

こうした表現の仕方を身に付けさせるためには、「なぜなら」「つまり」「例えば」などの接続詞を使った伝え方や、「～さんの意見に反対で」などと既に出された意見とつなげる伝え方などを習慣化することが大切です。すべての教科等の学習でも心掛けたいことです。

◇互いの考えを深めるために話し合うこと

相手にも分かるように表現したり、説明したりすることができれば、子どもたちは互いに聞き合い、伝え合ってお互いの考えを深めることができます。実社会にはさまざまな立場や考えの人がいて、実際の話合いでは対立したり共通理解したり、合意を形成したり、時には新しい考えを生み出したりします。社会科の授業でこうした話合いを大切にすることは、社会的事象を关系的に捉えたり、多面的に捉えたりすることによって、社会的事象の意味をより確かに理解するだけでなく、社会的な見方や考え方が養われ実社会に生きて働く力を育てることにつながります。



Q. 10 言語活動は学習評価の対象になりますか。

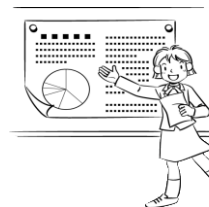
A. 授業における言語活動は直接的には学習評価の対象とは考えません。言語活動自体は目標実現のための手段であって、学習評価の対象となる目標自体ではないからです。

○言語活動と学習評価の捉え方

学習評価は目標に準拠した評価を基本として行われ、指導目標の実現の程度を測るものです。したがって、言語活動そのものを評価するのではなく、言語活動を取り入れることにより達成しようとした指導のねらいに照らして、その学習状況を各教科等の特性に応じた評価の観点で基づいて適切に評価することが基本となります。

授業の際には、言語活動が有効に展開されるように細やかな指導を工夫することが大切ですが、あくまでも、言語活動自体は指導の目標を達成するための手だてであり、学習評価の対象にはならないということを踏まえて指導や評価を行うことが大切です。

その際重要となることは、各教科等で育てたい力を明確にしておくことです。目標に準拠した評価を推進するためには、指導内容を学習指導要領に基づいて把握し、それを評価規準としての的確に設定する必要があります。具体的には、各教科等における「思考・判断・表現」に該当する観点の評価規準の内容が問われることとなります。評価規準の作成に当たっては、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（国立教育政策研究所）等を活用するとよいでしょう。



学習評価の目的

評価というと、子どもの学習状況を記録するために行うものと捉えがちですが、指導の段階に応じて子どもの学習状況を適切に評価することで、教師自身が学習指導の在り方を見直したり、個に応じた指導の充実を図ったりすることが大切になります。いわゆる『指導と評価の一体化』を意識しておくことが重要です。また、評価は子ども自身が学習状況に気づき、その後の学習に役立てたり、保護者に妥当性や信頼性のある評価を伝えることで家庭での学習を促したりする契機となります。

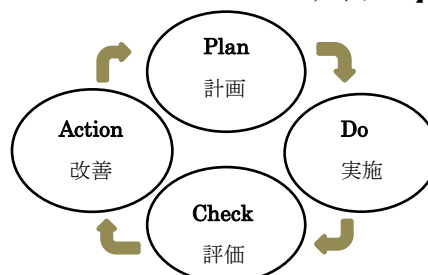
すなわち、学習評価には、指導の結果の面から教育水準の維持向上を図り、子どもの学力を保障する機能があります。

教師は子どもたちを観察し、つまづいていると判断したときには、瞬時の理解・判断により、何らかの手だて（リアクション）をとります。このような一連の営みが教師の評価活動です。



【学習指導と学習評価の

P D C A サイクル】



Plan : 指導計画等の作成

Do : 指導計画を踏まえた実施

Check : 学習状況や指導計画の評価

Action : 授業や指導計画の改善

※PDCAサイクルを機能させ、学習指導の改善を図ります。

Q. 11 指導計画上に言語活動を位置付ける際に、留意することは何ですか。

A. まずは各教科等のこれまでの言語活動を通じた指導について検証・把握しましょう。そして、各教科等の目標と指導事項との関連及び児童生徒の発達の段階や言語能力を踏まえ、言語活動を計画的に位置付けましょう。このことを通じて、各教科等の授業の構成や指導の在り方自体を工夫・改善していくことが求められているのです。

○言語活動を通して指導事項を指導する

国語科も含めて、各教科等の指導における「言語活動」の位置付けは、「言語活動を通して指導事項を指導する」ということであり、このことによって当該教科等の目標の実現、内容の習得を目指します。例えば、各教科等で一つの単元（題材）を構想するときには、次の過程が効果的です。

① 学習指導要領の内容（指導事項）を確認し、児童生徒に身に付けさせたい能力や態度〔単元（題材）の目標〕を設定する。

② ①にふさわしい学習活動（言語活動や体験活動等）を取り上げる。
→②を通して①を指導する。

③ ①、②にふさわしい教材や題材などを選定する。



例) 技術・家庭科（家庭分野）

① 自分や家族の食生活をよりよくすることに興味をもち、食生活の課題を見つけ、その解決を目指して日常食の調理などの計画を工夫し、実践、評価、改善することができる。

〔中学校学習指導要領の内容B（3）ウ〕

② 考えた献立を献立表に書く。献立表の内容をグループ内で説明し合い、気付いたことやアドバイスを伝え合う。

③ 献立表、調理計画表、実践レポート

また、言語活動の結果、子どもが書いたり話したりした内容について「既習の言葉が使われているか」「その教科の学習に必要な言葉や概念が使われているか」などを確認しましょう。

言語活動は知識・技能を活用する場面での学習活動の一つですので、その教科の学習に必要な言葉や概念の指導を十分に行っておかないと「言語活動」そのものが豊かなものになりません。言語活動が単に活動だけに終始することのないよう、言語の役割を踏まえて、年間指導計画や単元（題材）計画、単位時間の授業に位置付けることが大切です。【Q. 2 参照】

○発達の段階に応じた言語活動

中央教育審議会答申（平成20年1月）では、幼児期から小・中・高等学校へと発達の段階が上がるにつれて、具体と抽象、感覚と論理、事実と意見など、認識できるものや実践できるものが変化するとしています。その上で、各教科等においては、記録、要約、説明、論述といった言語活動を発達の段階に応じて行うことが重要であるとしています。「言語活動の充実に関する指導事例集（文部科学省）」では、児童生徒の発達の段階に応じた指導例が示されていますので参考にするとよいでしょう。【参考資料 参照】

Q. 12 話し合い活動を充実させるポイントは何ですか。

A. 研究授業などで子どもたちが活発に話し合っている姿を見ると、子ども一人一人が授業に参加していることを実感します。しかし、発表や意見交換はできていても、子どもの発言が相互に関連し合っていない授業に出会うこともあります。みんなで知恵を出し合いながら、よりよい考えをつくり上げていくという、討論や議論がなされていないのです。

話し合い活動を充実させるには、「話し合うことの意義」や「話し合いのルール」などを指導していくことがポイントになります。

○話し合うことの意義を指導する

話し合いの仕方について指導する前に、話し合いをすることの意義と大切さを子どもたちにしっかり伝え、活動に対する必要感をもたせるようにしましょう。

「話し合い活動」は、自分の考えの足りないところや違った考えを学び取ったり、つまづいている友だちに教えたりする場でもあります。そのためには、目標を達成するような経験を積み重ねていくことが大切です。そうすることによって、相手と自分の考えや意見の違いを擦り合わせたり、折り合いをつけたりしながら集団としての意見をまとめ、具体的な改善策を見いだしていく力を児童生徒に身に付けさせることができます。



また、お互いの違いを認め合い、支え合うことを通して、より豊かな人間関係をつくるようにしたいものです。

前述のように、子どもたちが話し合うことの意義を理解するようになると、それまでと比べて活発に発言するようになります。そのために教師は、子どもたちの多様な反応や価値観を受け入れていくことが指導のポイントになります。

○「話し合い活動」を充実させるポイント

「話し合い活動」が活発に行われるようにするためには、次のような事項について指導します。一例として参考に見てみましょう。

①話し合いのテーマを明確にする！

→何について話し合うのかが不明確な状況では、子どもたちは何について発言したらよいのかが分からず、自分の考えをもつこともできません。実際の授業では、教師の発問や指示が具体的であり、「何を考えたらよいか」を明確にしておくことが重要です。

②自分の考えをしっかりとらせる！

→児童生徒の中には、教師の発問に対してすぐに反応する子どももいれば、じっくり考えてから意思表示しようとする子どももいます。また、自分の考えがなかなかもてない子どももいます。反応のよい子どもだけを相手に話し合いを進行させると、どうしても発言力のある子どもの意見が中心となり、聞き役の子どもの数が増えてしまいます。

実際の指導においては、発言させる前にノートなどへ自分の考えを書かせるなどの配慮が必要となります。

③発言する際は、前の発言内容と結び付けて発言させる！

→これは、話し合い活動を成立させる最大のポイントと言えます。発言した内容に対して、自分は「賛成なのか」「反対なのか」「質問したいのか」、あるいは「他に違った意見を言いたいのか」をまず意思表示させて発言させるようにします。ハンドサインで意思表示させることも有効な手だての一つです。

「さっきの〇〇さんの考えに、付け足します。」
「私の考えは～です。」



④自分の考えの変容に気付かせる！

→話し合いの終末では、自分の考えが初めとどのように変わったのか、また変わらなかったのかを発言させるようにします。このことをノートなどへ記述を促すことも大切です。

「話し合い活動」のねらいは、学級やグループとしての考えに収束させることだけではありません。状況等によっては、意見をまとめあげていくこともあります。基本的には、「一人一人のより確かな考えを確立させること」に重きを置くことです。そのためには、自分の考えの変容を意識し、それを意思表示できるように導くことが指導のポイントと言えます。

○話し合いのルールづくり

従来、話し合いのルールは学級会活動などの場で指導されてきましたが、十分でない実態があります。話し合い活動を充実させるためには、学級や学校としてのルールやマナーを繰り返し指導し、子どもたちに徹底させます。例えば次のようなルールやマナーです。

- ・発言したいときには、手を挙げて意思表示させます。
- ・発言者には、指名されてから発言させます。
- ・発言者は友だちの方を向いて発言し、聞き手は発言者を見るようにします。
- ・発言は最後まで聞くようにします。
- ・次の発言者は、前の発言内容につなげて発言するようにします。
- ・発言者の言いたいことが分からないときには、そのままにせず、質問などして確かめます。

教師は、発言を求めてきた子どもだけでなく、意思表示していない子どもに対しても意図的に指名し、どの子どもにも発言する機会をつくるように心掛けましょう。

Q. 13 教科によっては、言語活動を位置付けることが難しいと感じています。どのような考え方で取り入れたらよいですか。

A. 県内の教員への意識調査の結果を分析したところ、図画工作・美術、音楽、体育・保健体育の教科において、約半数の教員が言語活動を位置付けることに戸惑いを感じていることが分かりました。

各教科等を問わずして共通に言えることは、「言語活動とは、今までにない新しい活動のことではない」ということです。

言語活動の趣旨は、各教科等の特質に応じた思考力・判断力・表現力等の育成の視点を踏まえて、それぞれの学習内容をきちんと学ばせることにあります。

○図画工作・美術科における言語活動の考え方

教科の特性である形や色、材料の効果、イメージを捉えながら発想や構想を練ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりすることなどを通して、思考力・判断力・表現力等の育成を図っていくことが大切になります。



児童生徒は、表現や鑑賞の場面で自然に話したり聞いたり、話し合ったりすることで発想を深めたり、つくりだす喜びを味わったりしています。このような姿に目を向けて、育てたい資質や能力を十分に高める学習活動を工夫することが、言語活動の充実において重要なポイントとなります。

◇表現においては、発想や構想の能力、創造的な技能を高めるために、次の学習の一層の充実を図る。

- ・材料や場所の特徴、表したいことや用途などについて、考えたことを伝え合うこと
- ・形や色、材料の感じなどを生かして表現すること

◇鑑賞においては、鑑賞の能力を高めるために次の学習の一層の充実を図る。

- ・感じたことや思ったことを話したり、友人と語り合ったりしながら、材料による感じの違い、表し方の変化をとらえ、身近にある作品や親しみのある作品などのよさや美しさを感じ取ること
- ・作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、対象の見方や感じ方を広げること。

◇指導計画の作成に当たっては、形や色彩、イメージなどの〔共通事項〕を視点に、美術科で育てようとする資質や能力を具体的に育成するような言語活動の充実を工夫すること。

(中学校美術科)

○音楽科における言語活動の考え方

音楽科における言語活動の充実のためには、まず歌唱、器楽、音楽づくり（中・高：創作）、鑑賞のすべての活動において、音楽そのもののよさや面白さを豊かに感じ取るようにすることが前提となります。その考え方は次のとおりです。

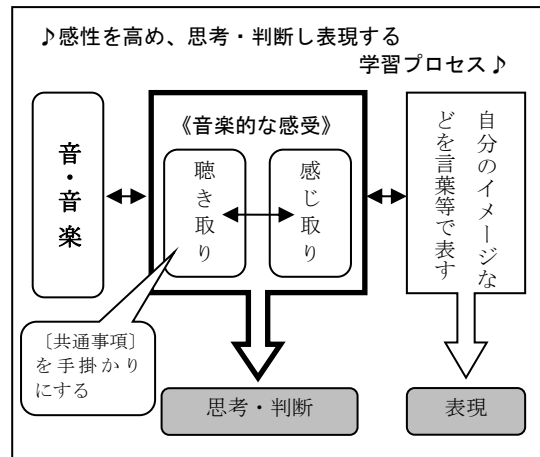


表現や鑑賞の活動において、音楽を形づくっている要素を聴き取り（中・高：知覚）、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取る（中・高：感受）学習や、感じ取ったことを基に、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもって音楽を表現したり、音楽全体を味わって聴いたりする学習を充実する。

上記の下線部分で示した学習は、音楽科の基礎・基本となる《音楽的な感受》に相当する学習指導要領の〔共通事項〕事項アの内容（高：音楽を形づくっている要素）のことを指しています。

すなわち、音楽科における言語活動を充実させるためには、言語化のきっかけとなる聴き取りこと（中・高：知覚）と感じ取りこと（中・高：感受）の学習活動が充実したものであることが前提となります。（右図参照）

そのためには、「何を聴き取るか？」の手掛かりとなる〔共通事項〕の扱いについて、十分に留意する必要があります。その要点は、以下のとおりです。



- ①音楽を形づくっている要素は、指導内容を示した言葉であるため、その内容を教師が正しく理解することが大切である。子どもへの提示については、分かりやすい言葉に変換して示すことも考えられる。
- ②子どもに聴き取らせたい要素を、教師がそのまま言うのではなく、子どもが自ら聴き取り感じ取るようにすることが必要である。
- ③音楽に関する用語等の言葉の共有化を図ることが肝要である。音楽の言葉を学級全体が使えるように共有し、活用することができるように掲示等の工夫が求められる。なお、その言葉には教師があらかじめ示したものだけでなく、子どもが見つけたもの、子どもの表現を教師が意味付けしたものを加える。

○体育・保健体育における言語活動の考え方

教科の特質を踏まえて、コミュニケーション能力を育成したり、論理的思考力を育んだりする観点から、ゲームや練習などにおける励ましや協力をすること、及び練習方法や作戦を考えたり、成果を振り返ったりするために話し合う活動などを充実させることが大切になります。



また、健康・安全に関する知識を活用する学習活動を充実させることも大切な視点です。

その際、次に挙げる言語活動の考え方等に留意して取り組むようにしましょう。

◇他者とのコミュニケーション能力の育成

- ・運動領域では、身体表現や、ゲーム場面での意思疎通などの集団的活動で互いに励まし合ったり、相手のチームの健闘を称えたりして、協力して学び合う活動を取り入れる。
- ・保健領域では、実習や実験などを実施した際の観察や体験を基に話し合いを行い、考察し、身近な生活における課題や解決の方法を見付けたり、選んだりするなどの活動を充実する。

◇論理的思考力の育成

- ・運動領域では、資料を基に練習方法や作戦を考えて教え合ったり、その成果や課題について話し合ったり、学習カードにまとめたりする活動を取り入れる。
- ・保健領域では、健康に関わる概念や原則を基に、自分の生活と比較したり、身近な生活との関係を見付けたりしたことを説明するなどの活動を重視する。

書いたことを読み解く

子どもたちが書いた文章から、教科のねらいに即した記述を読み解くことは、指導者としての力量が問われているところでもあります。

「書く活動」の前に、「何を考えさせたいのか」「書くことでどのような力が身につくのか」を押さえておかなければなりません。「長い文章を書いているからOK!」という捉え方では「活動あって学びなし」になりかねません。

常に、学習のねらいに立ち返ることで、効果的な言語活動が展開されるように授業を見直していきましょう。



思考力・判断力・表現力等を育むために

平成20年答申においては、思考力・判断力・表現力等を育むためには次のような学習活動が重要であり、このような活動を各教科等において行うことが不可欠であるとしています。Q.15にも具体例を示していますので、参考にしてください。

① 体験から感じ取ったことを表現する

(例)・日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する

② 事実を正確に理解し伝達する

(例)・身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する

③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする

(例)・需要、供給などの概念で価格の変動をとらえて生産活動や消費活動に生かす
・衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する

④ 情報を分析・評価し、論述する

(例)・学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連付けるなど考えるための技法を活用し、課題を整理する
・文章や資料を読んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめてA4・1枚(1000字程度)といった所与の条件の中で表現する
・自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり、これらを用いて分かりやすく表現したりする
・自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する

⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

(例)・理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改善したりする
・芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する

⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

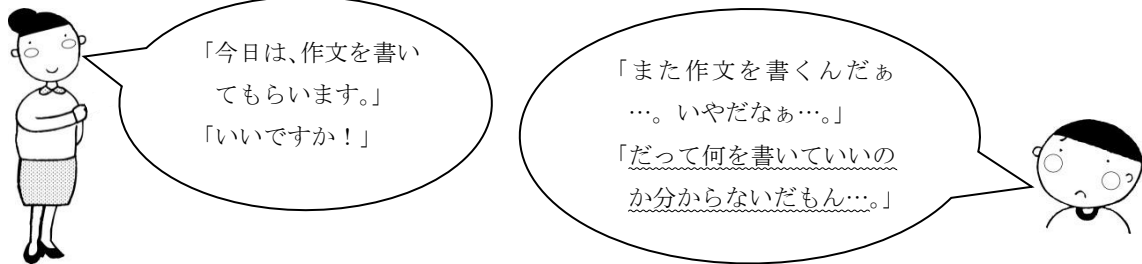
(例)・予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説と検証方法を討論しながら考えを深め合う
・将来の予測に関する問題などにおいて、問答やディベートの形式を用いて議論を深め、より高次の解決策に至る経験をさせる



Q. 14 書くことの抵抗感を少なくしたり、書く力を高めたりするには、どのような手だてが考えられますか。

A. 各種の学力調査に共通の課題点として挙げられていることに「書く力」があります。この課題の背景には、「書くことが見付けられない」や「文をどのように組み立てて書けばよいか分からない」という子どもの現状があります。国語科に限らず、それぞれの教科等において、発達の段階に応じた「書く力」を育てるための取組を実践していくようにしましょう。

○書くことを見付けさせる手だて



子どもたちが、作文などの「書くこと」を難しがる要因の一つとして、「書くことが見付けられない」ということが挙げられます。

そのような場合には、以下のように年間を通した題材を設定しておき、機会を設けて、自分の考え方やものの捉え方を短作文で表現させてみることで、書くことへの抵抗感を軽減していきたいものです。

こんな題材で書いてみよう！

4月	5月	6月	7月	8月	9月
入学式 新しい先生 新しい友だち えんそく 1学期のめあて 学校たんけん 最高学年になって ○年生になって 春を見つけたよ 委員会活動	クラブ活動 修学旅行 田植え 朝顔を植えたよ こいのぼり かしわもち 子どもの日 宿泊体験学習 プール掃除	プール開き 水泳 雨 つゆ かたつむり あじさい ほたる 虫歯予防デー 避難訓練	たなばた 水泳大会 1学期をふりかえって 終業式 セミ 海の日 通知票	お祭り 盆踊り 登校日 スイカ お盆 海 カブトムシ 花火大会 ラジオ体操 日焼け	夏休みの思い出 運動会 敬老会 梨 台風 お月見 虫取り わたしの宝物 人権について プールおさめ

次のようなことに目を向けて書いてみてもおもしろいよ！
自分の考え方やものとの捉え方がグングンのびていくよ！

- | | | |
|-----------------|-------------------|-------------|
| ①自分なりに工夫したこと | ②しつこくやったこと | ③学校でほめられたこと |
| ④学校の行き帰りで見たこと | ⑤季節の変わり方に目を向けて | ⑥勇気を出したこと |
| ⑦学校での勉強のこと | ⑧友だちのこと | ⑨楽しかったこと |
| ⑩学校の掲示で見たこと | ⑪テレビを観て考えたこと | ⑫予想してみたこと |
| ⑬自分が成長したなどと思うこと | ⑭くやしかったことや悲しかったこと | ⑮夢や希望 |

このような、短作文の積み上げによって、書くことを見付ける力(題材選択能力)を身に付けさせていくこともできます。

上記の取組は、各教科等の特質に応じて取り入れることも可能です。「書く力を育てるのは国語科の役割だ！」と狭く捉えるのではなく、現在行っている授業を見直す視点として考えてみましょう。

○書くことに慣れさせる手だて

前頁の題材一覧表などによって、「書きたいこと」「伝えたいこと」「記録しておきたいこと」など、書く題材が見付かるようになると、子どもたちは意欲的に書くことに取り組むようになります。次の段階の手だてとしては、具体的な実践を通して、書くことに慣れさせる必要があります。

◇実践例1「100マス作文」

右のワークシートは、「田植え」を題材として自身が体験した事実を100文字にまとめて書いたものです。また、まとめたことを基にして「五・七・五」の川柳で思いを書き表しています。

ここで着目したいことは、小学校中学年段階で三分間に100マス作文を書くことができるように、低学年段階（80字）からの積み上げを継続しているということです。これは、全ての教科等に通じる重要な視点です。

その他にも、指導者のコメントが肯定的な内容である点や、「五・七・五」にまとめることによって、言葉の取捨選択をする力が育っている点が参考になります。

The worksheet shows a 10x10 grid filled with handwritten Japanese text. To the right of the grid, there is a date '五月九日' and a title '田植え'. Below the grid, there are two small photographs: one showing a person planting rice in a field, and another showing a green rice paddy. The text in the grid is a 100-character composition about the experience of rice planting.

(小学校4年 ワークシート例)

◇実践例2「意見を明確にして理由を記述する」

日本語には、述語が最後にきて、それを聞くまでは結論が分からないという言語特性があります。「私は○○について、△△なので、賛成しません」と言った場合、賛成するかどうか、最後まで注意深く聞いていないと分からないということがあります。

そこで、分かりやすい文章を書くために、意見を先に述べることに慣れさせる手だてとして有効なのが、意見欄を別に設けたワークシートです（右図参照）。「私は～に賛成・反対します。」（～は空欄）という欄で、自分の意見を先に述べた後、その理由付けを書かせるワークシートが効果的です。理由付けのところは、まずは細かな字数制限はせずに、何でも理由付けになりそうなことを自由に書かせることです。

また、発達の段階を踏まえながら「一つ目は～。二つ目は～。三つ目は～」や「理由は二つあります。」など、順序よく、文章の全体構成を考えた書き方を指導していくことも有効な手だてと言えます。

The template consists of a large rectangular box on the left labeled '(意見欄)' (Opinion Column). To its right, there are several smaller boxes and text: '○意見を明確にして' (Express opinions clearly), '理由を記述するワークシート' (Worksheet for describing reasons), '()年()組()番氏名' (Year, Group, and Name), 'わたしは ～ に賛成・反対です。' (I agree/disagree with ~), and '（賛成・反対のどちらか一方に○をつける。）' (Mark with ○ on either side of agreement/disagreement). The word 'なぜなら' (Because) is written vertically on the far left.

国語科では、「書くこと」の指導において系統性を踏まえた実践が行われており、上記の例以外にも様々な取組が展開されています。指導者による教科間の連携を図ることで、各教科等の特質に応じた有効な手だてを模索していきましょう。

Q. 15 思考力・判断力・表現力等を育むためには、どのような学習活動を行うと効果的ですか。

A. 思考力・判断力・表現力等を育む学習活動として、下記に示す6つの学習活動例を各教科等において行うことが不可欠です。学習指導を行う際は、これらを各教科等の特質に即して捉え、言語活動の充実を図るための具体的な学習活動として、記録、要約、説明、論述などの言語活動を発達の段階に応じて取り入れていくことが大切です。

【思考力・判断力・表現力等を育む学習活動の例】

- ①体験から感じ取ったことを表現する
- ②事実を正確に理解し伝達する
- ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④情報を分析・評価し、論述する
- ⑤課題について、構想を立てて実践し、評価・改善する
- ⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

意識調査では、教員が行っている言語活動を充実させるための学習活動の工夫において、「事実や情報を分析したり評価したりして、論述すること」や「課題について、構想を立てて実践し、結果を評価したり、改善したりすること」が他の項目に比べて低い傾向にありました。そこで、ここでは、この2点に関わる実践について、言語活動の充実を図るポイントを解説しながら紹介します。

○事実や情報を分析したり評価したりして、論述する

「思考力・判断力・表現力等を育む学習活動の例」の「④情報を分析・評価し、論述する」において重視する点の一つは、自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読みとったり、これらを用いて分かりやすく表現したりすることです。



これを「理科」に当てはめて考えてみると、

観察・実験の結果を分析し解釈して考察を書いたり、自分の考えを人に伝えたりすること。その際、分析・解釈し、自分の考えを整理しやすくするために、結果をグラフ化したり、図表で表したりすること。また、実験前に立てた仮説が正しいかどうかを判断したり、実験結果の確からしさを検討したりすること。

などが考えられます。

上記④以外の学習活動の例として示された内容も、理科の学習活動として今まで行われてきたものであり、言語活動に深く関わる内容です。

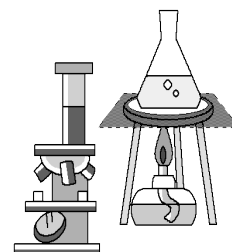
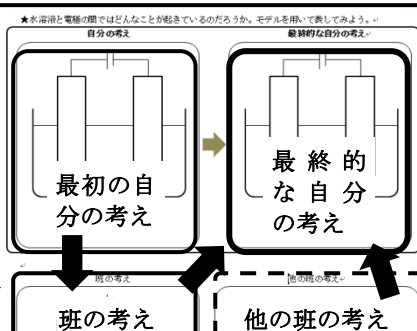
他の教科等においても学習活動例を授業場面に即して捉え直し、各教科等の目標の実現を目指した学習活動となるように工夫しましょう。

それでは、理科における④に関わる学習活動について、言語活動の充実を図るポイントを紹介します。

【中学校 理科：電気分解をイオンで考える】

目標：電流が流れているときの電極での電子のやりとりについて、イオンのモデル図で表す。

自分の考えが班での話し合い等を通してどのように変容したかが分かるようなワークシートを工夫することで、生徒は学習や思考の過程を振り返ることができます。また、教師にとっても生徒の学習の過程を捉えることができ、指導に生かすことができます。
(ワークシートの例)



水溶液内部の様子を実験結果から考察します。思考・判断した結果を文章だけでなく、モデルやグラフ、化学式等を用いて表現することも理科では「言語活動」と捉えます。よって「科学的な思考・表現」を評価する際は、思考・判断したことを表出された内容と一体的に評価することが大切です。

主な学習活動	教師の支援・留意点◇	評価☆
<p>○実験結果をイオンのモデル図を用いて表す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人でワークシートに記入する。 ・班で説明し合い、班の意見をまとめる。 <p>(ホワイトボードを使用)</p> <p>○班の意見を代表者が発表する。</p>	<p>◇導入で確認したイオンや電子とそのモデルを示し、<u>モデル図</u>を作成する際のヒントとする。</p> <p>◇モデル図に表しにくい表現は、言葉で補うように促す。</p> <p>◇電子の流れる向きを逆にしている場合には、金属では電流と電子の流れが逆であることを示す。</p> <p>☆電流が流れているときの電極での電子のやりとりについて、イオンのモデル図で表している。【科学的な思考・表現】</p>	

ホワイトボードのようなツールを用いることで、情報が共有化されるとともに、考えを限られたスペースに簡潔にまとめたり、相手に伝わりやすくしようと工夫したりすることができます。そうすることで、おのずと表や記号、色を効果的に用いるようになります。このようなツールは、継続して用いることでよりその効果が上がります。

発言の確認や記録の確認・分析によって、考察を表現しているかどうかを評価します。このとき、結果(事実の記録)と考察(考え)が区別されているか、科学的な概念や根拠を基に、考えたことを分かりやすく簡潔に表現しているかどうかポイントになります。上手く表現できていない場合は、「結論を先に述べ、次に根拠を述べる」等の話形を提示し利用させることも考えられます。

○課題について、構想を立てて実践し、評価・改善する

将来にわたって変化し続ける社会に主体的に対応していくためには、課題に対して、自分なりの判断をして課題を解決することができる能力（問題解決能力）が必要です。

技術・家庭科では、問題解決能力を育成するために、生徒自らが課題を発見し、習得した知識及び技術を活用し意欲をもって追究し、解決のために方策を探るなどの学習を繰り返し行うことが大切であるとされています。

そのため、問題解決的な学習において、生活における課題を解決するために言葉や図表、概念などを用いて考えたり、説明したりするなどの学習活動の充実が求められています。

その他にも「理科の調査研究において、仮説を立てて観察・実験を行い、その結果を考察し、まとめ、表現したり改善したりする」「芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する」など、教科の特質に応じた学習活動が考えられます。

【家庭分野：マイ食事プランを考えよう（食生活の課題と実践）】

○主な学習活動（5時間）

時間	○ねらい・学習活動	言語活動に関する指導上の留意点
1	<p>○自分の食事の課題を見付けることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自の「食事調べ」から、自分の食事の課題を見付ける。 ・4人程度のグループで自分の食事の課題や課題解決のための献立のテーマを発表し合う。 	<p>〈課題をもつ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自の「食事調べ」で記載されている内容と、<u>これまでに学習した</u>食品群別摂取量などと比較することを通して、自分の食生活の現状と課題を明確にする。
2	<p>○課題解決のための1食分の献立を工夫することができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・献立のテーマを基に、1食分の献立を考えワークシートに記入する。 ・各自が考えた献立の工夫を同じ課題のグループで発表し合い、お互いに助言し合う。 ・話し合いを参考にして、1食分の献立を見直し、修正する。 	<p>〈構想を立てる（実践計画）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートは、学んだ知識や技術を活用して考えられるように、献立を食品群別にまとめたり、調理台やコンロでの作業手順を時間ごとに記入したりできるようにする。 ・献立の工夫や調理計画の工夫を記入することで、自分の考えを整理したり、発表したりできるようにする。 <p>〈実践計画の修正〉</p>
3	<p>○課題解決のための1食分の献立の調理計画を工夫することができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えた1食分の献立について、調理に必要な手順や時間を考えてワークシートに記入する。 ・各自が考えた調理計画を同じ課題のグループで発表し合う。 ・話し合いを参考にして、家庭実践に向けた調理計画を見直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・献立を考える場面や、家庭実践のための調理計画を考える場面では、付箋を用いて生徒同士の相互評価を行う。ワークシートには付箋紙を添付する欄を設ける。 ・話し合いにより献立や調理計画の内容を変更するときは朱書きするなど、考えた過程が分かるようにする。

時間外	*家庭での実践	〈家庭との連携〉 <ul style="list-style-type: none"> 家庭実践するよさや生活の価値に気付かせるためにも、学習内容を家庭に知らせ、実践レポートに家族の感想を記入してもらうなど、家庭での実践について協力を得る。
4 5	<p>○実践の成果と課題についてまとめたり、発表したりして、実践の改善方法を考えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 同じ課題のグループで実践を発表し合い、相互評価する。 課題ごとにグループの代表者が実践発表する。 グループでの話合いや代表者の発表を聞き、自分の実践の改善方法を考えたり、気付いたりしたことをワークシートにまとめる。 	〈実践の評価・改善〉 <ul style="list-style-type: none"> 実践レポートは、実践を通して工夫したことやうまくいかなかったこと、その原因等を記入できるようにする。 実践レポートについては、「書く」活動の深まりを考慮して、様式等を吟味する。



何を表現させるのかを大切に

調べたことを資料にまとめて発表する学習活動の際、児童生徒の表現が「工夫している」や「適している」といった抽象度の高い言葉にとどまっていないでしょうか？「どんな工夫をしているのか」や「何が適しているのか」という具体的な事実を具体的な言葉で語らせることが大切です。

教師の積極的な支援を

教師の発問や指示を具体化することも、言語活動の充実につながります。「考えをまとめて発表しよう」と言っても、一つに集約するのか、それともいくつかあったものを並列的に出すのか、様々なものがあります。このようなことを発問や指示のレベルで明確にしておくことは、児童生徒にとって、どういう方向で考えをまとめていけばよいのかという方向性や思考の手掛かりを得ることにつながります。また、発問や指示を具体化することは、その時間のねらいは何かということを教師が見極めていく手掛かりにもなっていきます。

前頁に示した実習や観察したことをレポートにまとめる活動では、言語活動を通して一人一人が考えた過程が分かるようにレポートの記入欄を工夫するとよいでしょう。例えば、実習や観察のときに気付いたことや発見したこと、疑問に思ったこと、うまくいかなかったこと、予想との違いやその原因について考えたこと、話合いを通して気付いたことなどを言葉や絵で記入できるようなワークシートが考えられます。話し合う場面に付箋を用いて、話合いの過程が分かるように工夫した例もみられます。

Q. 16 学校全体で「言語活動の充実」に取り組みたいですのですが、どのような取組ができますか。

A. 教職員の共通理解の下、共通の目標に向かって取り組むことが、言語活動の充実を図る上でも重要です。そのためには、まず、全教職員が言語活動の充実に向けて認識を共有することです。そして、カリキュラム・マネジメントの視点に立った教育課程の編成・実施や全体計画の作成、校内研究への位置付け、学年部や各教科等での連携した取組など、学校全体で取り組む工夫を考えていきましょう。

○全教職員の認識の共有

各教科等における「言語活動」に該当する学習活動は今までも行われてきました。しかし、今までどおりでよいのかというと、そうではありません。「言語活動の充実」を実現するためには、全教職員が同じ認識をもち取り組むことが何より大切です。そこで、各学校においては、今までの取組を「言語活動の充実」の視点で見直し、ふさわしい指導を共有し、指導計画に明示したり、「言語活動」を校内研究に位置付けたりして指導の在り方を探っていくなど、協働して指導していくことが大切です。

- ・「言語活動の充実」って何なのか、みんなで共通理解することから始めましょう！
- ・教科の特性に応じて授業を見直し、改善しましょう！
- ・学習のねらいに迫ることを大切にしましょう！



○カリキュラム・マネジメントの視点に立った教育課程の編成・実施や全体計画の作成

各学校においては、学習指導要領を基に、それぞれの学校の特色や特徴、地域の実態等を考慮して教育課程を編成することが求められています。小・中・高等学校それぞれに成長する児童生徒を具体的にイメージし、どのような能力や態度を身に付けさせたいかを意識しておくことが大切です。

これが学校全体で児童生徒を育てていくという意識につながり、この中に言語活動の充実を図る工夫を盛り込むことで、具体的な方向性を全教職員で確認することができます。そして、このような計画が、具体の言語活動を通じた授業を意識的に行うための指針となります。

カリキュラム・マネジメントとは？

学校の教育目標の実現に向けて、子どもや地域の実態を踏まえ、教育課程を編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくことであり、また、そのための条件づくり・整備のことです。

○校内研究への位置付け

言語活動の充実を校内研究に位置付けて研究を推進することは、教職員の共通理解を図り、学校全体で言語活動の充実を図っていこうとする意識を高めます。

研究推進に当たっては、以下のことを意識しておきましょう。

- 言語活動の充実の背景や意義について共通理解する。 【Q. 1 参照】
- 言語活動のねらいと特質を理解する。
 - ・国語科の役割と授業改善の方向性を明確にすること 【Q. 8 参照】
 - ・国語科を基盤として各教科等における言語活動の充実を図ること 【Q. 9 参照】
 - ・言語活動は各教科等の目標の実現のための手だてであり、最も効果的な意図的、計画的な学習活動であること 【Q. 11 参照】
 - ・言語活動の充実は、各教科等に即した用語や表現方法など言語に関する能力の育成につながる事 【Q. 3～7 参照】

以下に、学年部を中心とした校内研究での取組事例を紹介します。



学年部や各教科等で連携して取り組むことは、言語活動の充実を図る上で、大切な視点の一つになります。

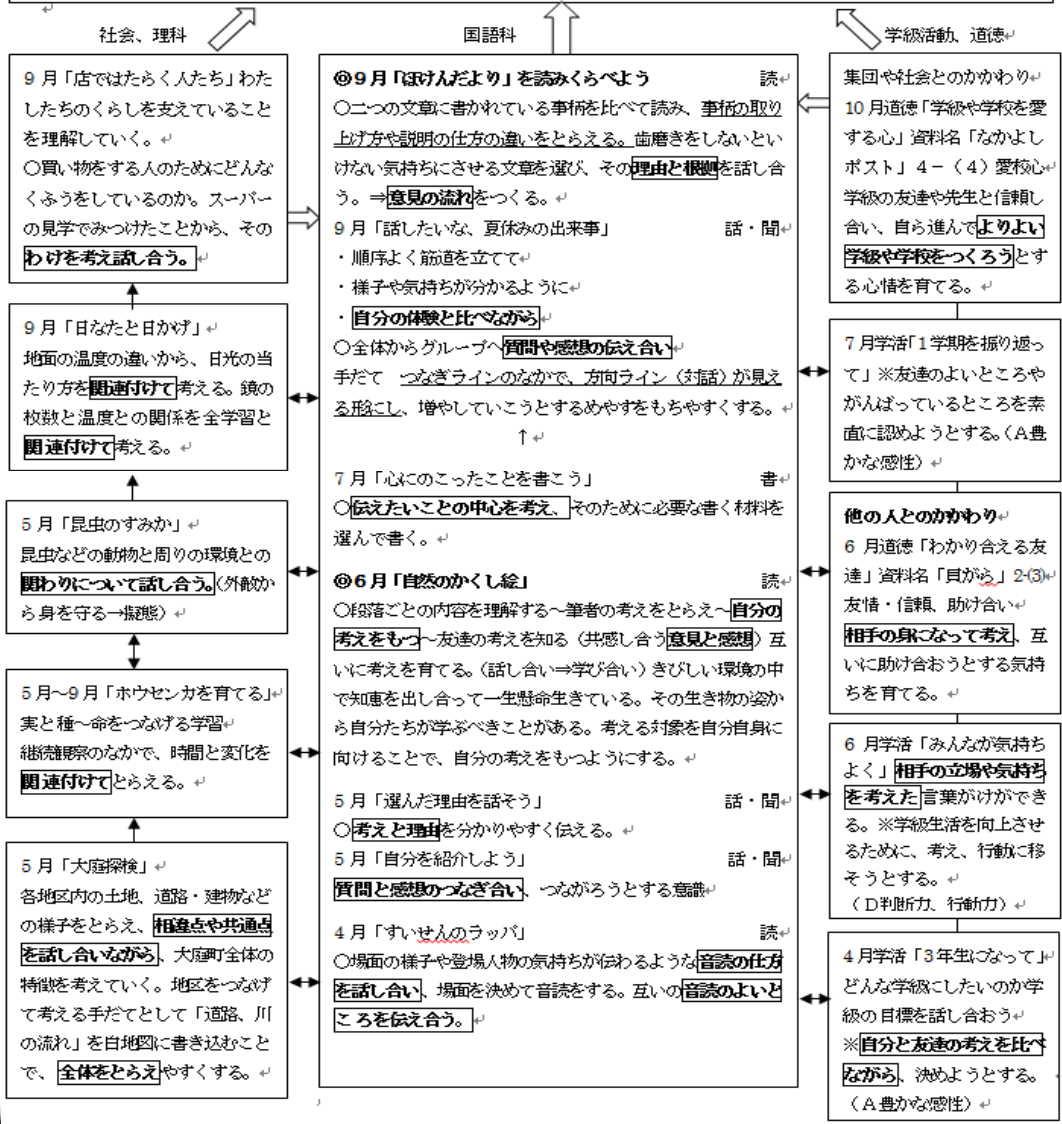
授業研究を中心に協議を重ねながら学校全体で授業改善に取り組んでいます。

異学年で参観し合い協議することで、学年間の系統性の確認や、授業改善の方向性を共有することができます。

「話し合う力」を育てるための指導の流れ（第3学年）

国語科

10月 相手の話をよく聞いて話し合おう —こちら、「子ども相談室」— 話し合い
 ○自分の考えと理由を分かりやすく話したり、相手の伝えたいことを考えながら聞いたりして話し合う。
 生活問題をもとに話し合うことで、互いに共通した課題をもち、**自分の体験をもとに**話し合うことができる。
 自分の考えと理由を分かりやすく話す。相手の伝えたい考えを聴き取り、**意見と感想を交えながら、互いの考えを関連付けながら話し合いの流れをつつていく。**



各教科、単元等において育てたい力との関連を考え、「話し合う力」を育てるためのポイントを示しています。

この計画により、国語科を中心としながら、各教科等との連携を図りつつ、共通理解の下での指導が可能となります。

Q. 17 保護者や地域の方と連携することができますか。

A. 児童生徒の言語環境の整備面で協力をお願いすることができます。また、コミュニケーション力を育成したり、児童生徒の学習習慣の確立を図ったりする上でも、保護者や地域の方との連携が必要です。

○読書活動の推進に向けた協力

保護者や地域のボランティアの方に、読書活動の推進に向けた協力をお願いすることができます。言語に関する能力を育むに当たって、読書活動を推進していくことは不可欠です。そのためには、児童生徒が本に親しむような言語環境を整えていくことが大切で、読書活動の活性化に向け、読み聞かせなどの活動の支援をお願いすることができます。

○コミュニケーション力の育成

コミュニケーション力の育成に向けて、家庭と連携を図って進めることも大切です。児童生徒の語彙力を豊富にしていくことは、コミュニケーションの充実に向けては欠かせない条件です。そのためには、家庭との連携を図って、生活の中での会話などを増やし、語彙力をつけたり、学習で身に付けた語彙力を使って、コミュニケーションを図ったりしていくことが大切です。

○家庭学習の定着

言語活動で培った力を定着させていくには、家庭との連携を密に図ることが大切です。家庭学習の定着に向けて、家庭に便り等を配布して、協力を求めることも大切な連携の一つです。

家庭学習の手引き（保護者用）

保護者の皆様へ
この「家庭学習の手引き」には、子どもたちの発達段階を考慮して、家庭学習として取り組んでほしいこと、学校での学習内容との関連などが示されています。毎日の家庭学習への取組の参考にしていただければと思います。

1. 家庭学習とは

家庭学習

- 復習：学校で学んだことを家で学習し、習ったことを確実に身につけるもの。
- 予習：習っていないことを事前に調べ、学校での学習をよりよく進めるもの。

この家庭学習を実りあるものにし、子どもに習慣づけていくためには、家庭と学校とが手を取り合って実践することが大切です。

2. 家庭学習の必要性

【学力向上の面から】
学習したことを確実に身につけるためには、その目的のために、家で復習すると効果が上がります。より速く・正確に計算したり、より正しく文字や文章を書いたりする力は一朝一夕には育ちません。だからこそ、毎日復習を家で継続していくことが大切なのです。

【社会的な背景から】
よりよい生活習慣や学習習慣をしっかりと身につけることが、自立への基礎を培うことにつながっていきます。家庭学習では、自分が向上することの楽しさや、人から認められることの喜び、また、それらを支えるやる気を身につけることができます。

3. 家庭学習を進めるときに気をつけること

- 毎日一定時間、学習に取り組むこと。
- 保護者が学習の様子を見届ける。
- テストやプリントなど、ファイルとして、いつでも復習しやすいように整理する。

○ 学習に集中できるよう、テレビを消す・机の上を片付ける

4. 家庭学習を効果的に進めるために

(1) 家庭学習の内容と時間の目安
家庭学習の時間は、あくまでも標準であり、個人差を考慮する必要があります。
低学年…30分
中学年…50分
高学年…80分

主な内容
日記、漢字ドリル、音読、計算ドリル、自主学習（授業の復習・予習・自主課題）

(2) 学年ごとの時間配分
基本的に、学校からの課題（授業の復習）に取り組みます。中・高学年になると、子どもが自分で課題設定する学習（子ども自身が必要な学習内容を選び取り組む）が増えます。その際、『家庭学習の手引き（児童用）』の内容を参考にして進めると効果的です。

自分の課題に取り組み時間
30分 50分 80分

(3) 家庭学習の時間確保
家庭学習の習慣化は、生活習慣を身につけることが大切です。そのためには、帰ってから時間の使い方が大切です。例えば、下のような時間のとり方もあります。それぞれの家庭で工夫してください。

【時間確保の例】

16:00	帰宅
16:30~17:30	家庭学習の時間
17:30~17:45	明日の準備
17:45~20:00	夕食・風呂・自由など
20:00~21:00	自由
21:00	就寝

5. 子どもへの声かけ
家庭学習において、子どもへの声かけは大変重要なものです。子どもがやる気になる3つの声かけを紹介します。

① ほめる …「こんなにきれいに書けるのだね。すごいね」
② はげます …「毎日続ければ必ず速く計算ができるようになるよ」
③ 励ます …「この頃、漢字の間違いがなくなってきたね。この調子で漢字を多くつかってみたいいいよ」

参考文献「確かな学力が身に付く 学習のしつけ」(小学館)より

【一島根県教育用ポータルサイト「家庭学習の手引き」の紹介から】

Q. 18 学校の言語環境を充実させたいのですが、どのようなことに配慮するとよいですか。

A. 言語環境は、子どもたちが言語に対して興味・関心をもち、言語への理解を深め、結果として子どもたちの言語能力を高めるという意味で大きな影響を及ぼすものです。

例えば、教師の言葉遣いや板書なども言語環境の一つとして考えられます。言語環境を充実させていく上でのポイントは、「学校全体としての取組」と、「学校図書館の整備」です。

○学校全体としての取組

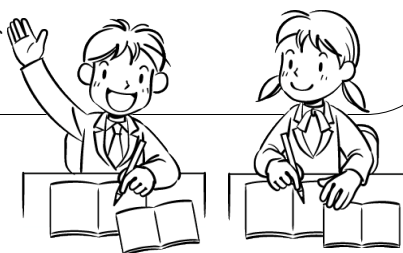
- ・教師は正しい言語で話し、黒板などに正確で丁寧な文字を書くこと。
- ・校内の掲示板やポスター、児童（生徒）に配布する印刷物において用語や文字を適正に使用すること。
- ・校内放送において、適切な言葉を使って簡潔に分かりやすく話すこと。
- ・適切な話し言葉や文字が用いられている教材を使用すること。
- ・教師と児童（生徒）、児童（生徒）相互の話し言葉が適切に行われるような状況をつくること。
- ・児童（生徒）が集団の中で安心して話ができるような教師と児童（生徒）、児童（生徒）相互の好ましい人間関係を築くことなどに留意すること。

学校全体で共通理解を図り、日常の指導の中で、教師自身が言語の役割や機能などについての意義を理解し、関心をもって正しい国語を用いて指導したり、児童生徒より一層高い意識と関心をもって指導に当たったりすることが大切です。

また、言語環境を整える一例として、話し方、聴き方、交流の仕方などの学び方の型を提示していくことも大切な言語環境だと考えます。例えば、次のような話型を示して、「説明する」言語活動の支援をしている学校もあります。

【「説明する」言語活動を意識した話型の例】

- ・○○と考えた理由は・・・（理由の提示）
- ・まず、次に・・・（順序）
- ・前に習った○○を使って考えると・・・（根拠）
- ・これからきまりを見つけると・・・（規則性）
- ・例えば・・・（例示）
- ・同じところは・・・（類似）
- ・ちがうところは・・・（相違）
- ・もっとわかりやすいのは・・・（難易）
- ・さらによい方法は・・・（改良） など



○学校図書館の整備

言語環境の整備においては、学校図書館の整備を図ることも重要です。学校図書館には、児童生徒の感性や情緒を育む読書センターとしての機能と、児童生徒の主體的な学びを支える学習・情報センターとしての機能があります。そうした機能を充実させていくことも、言語環境の整備としては大切です。

◇読書センター機能を充実させるために

- ・全ての教科等を通じて様々な文章や資料を読んだり調べたりする多様な読書活動を進める。
- ・全校一斉の読書活動や、学校での読み聞かせなどの取組を行う。
- ・学校司書と連携して推薦図書のコーナーを設けたり、卒業までに一定の読書量を推奨するなどの目標を設定したりする。
- ・図書委員会による本の紹介や図書館行事の実施、放送委員会による読み聞かせなど、委員会活動を通して図書館活用の促進を図る。
- ・保護者や地域社会の人々との連携協力による、地域に開かれた学校図書館づくりに努める。など

◇学習・情報センター機能を充実させるために

- ・充実した調べ学習ができるような資料をそろえるために、公共図書館や近隣の学校等と連携して資料を収集する。
- ・全ての教科等を通じて、学校図書館を活用した学習活動の充実を図る。
- ・学校図書館の図書や資料を整備する。
- ・学校図書館の利用について、年間指導計画を基に計画的に指導を行うとともに、司書教諭や学校司書等と連携して学校図書館を授業に活用する。
- ・資料から自分の必要とする情報が得られるように、辞書や図鑑の検索の仕方などの情報活用能力を児童生徒に身に付けさせる。など

読書センター機能と学習・情報センター機能の充実の基盤として、子どもたちが学校図書館を楽しく利用するための配慮も必要です。例えば、壁やカーテンの色への配慮、畳敷きの絵本コーナーなどをはじめとして、読書に親しむことができる環境の整備も望まれます。



こうした言語環境の整備が言語環境の充実のために必要不可欠であると考えます。

Q. 19 言語活動の充実のために、学校図書館を活用したどのような授業づくりが考えられますか。

A. 授業づくりにおける学校図書館の役割は、「教室での授業で学んだことを確かめ、広げ、深める」「課題を設定し、その課題を解決するために必要な図書資料から情報を収集、整理・分析し、自分の考えをまとめて発表する」など、児童生徒の主体的な学習を支援することです。また、これらの学習を展開する際に必要となる技能（「課題設定の仕方」「資料からの情報の探し方」「情報の整理の仕方」「資料へのまとめ方」など）を指導することで、児童生徒の情報活用能力の育成につながります。



○学校図書館を活用した授業づくりの視点

各教科等の指導における学校図書館活用の視点は、次のように考えられます。

◇図書資料を活用して探究的な学習を展開する

①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・発表といった一連のプロセスをもつ探究的な学習の展開には、まとまった時間や準備のための手間も必要です。しかし、それぞれのプロセスで必要な情報活用のためのスキルを、学校図書館などを活用し、児童生徒に身に付けさせておくことは大切です。

例)・家庭科の学習において、郷土料理や衣服の歴史などから課題を設定し、それについて図書資料から情報を探してまとめて発表する。また、発表の仕方そのものを図書資料を基に考えさせたり、献立を考えて調理するなどの実習・製作を行う際に、図書資料を活用したりする。

◇情景を想像させたりイメージをもたせたりする

子どもたちの想像やイメージを補完し、表現に生かすための手だてとしての図書資料の活用も考えられます。

例)・音楽の歌唱指導において、児童生徒に歌詞の情景を想像させるための手だてとして写真、絵画、詩などを活用する。
・図画工作において、描きたいもののイメージをもたせるための補助資料として、子どもの思いに応じて写真や図鑑などを活用する。

これらの取組は授業の中だけのことではなく、学校司書と連携して、あらかじめ図書館に関連図書のコーナーを作ってもらうことで、子ども達は授業までにさまざまな図書資料に触れ、思いをふくらませておくこともできるでしょう。

◇学習内容の理解を助けたり、学んだことを定着させたりする

学習内容を理解するための一助としたり、教科書教材で学んだ知識を定着させたりするために図書資料を活用することもできます。

例)・理科の学習において、実際には体験させることが困難な観察や実験などについて、図書館に所蔵してあるDVDや写真などを活用する。
・国語の学習において、説明文の学習後、図書資料を使って同じように説明文を書くことで、学習したことをより定着させる。

◇興味・関心を喚起する

学習に対する子どもたちの意欲を高めるための手段としても活用できます。

- 例)・数学の学習において、公式を導き出した数学者の伝記を学習の導入で読む。
 ・算数の学習において、グラフ学習の発展として統計年鑑を開き、様々なグラフの存在を知らせたり、「数」をテーマとした本をブックトークしたりする。

○学校図書館を活用した授業づくりのポイント

ここでは、学習指導案に記されている「学習活動」や「支援」を手掛かりにして学校図書館を活用した授業づくりにおけるポイントについて確認しましょう。

- 教材 「虫は道具をもっている さわぐちたまみ」(東京書籍 小学校2年下)
 ○目標 本から必要な情報を探し、大切な言葉を考えながら表にまとめる。
 ○活動内容 図書館で虫について書かれた本を読み、虫の体のつくりと道具のような働きをメモに書く。
 虫の体のつくりと働きが、人間が何をするのに似ているか考え、メモに付け加える。

〈相手意識〉作成した「ふしぎ虫ずかん」は友だちに読んでもらうだけでなく、学校図書館に展示して、全校児童にも読んでもらえるようにします。学習のゴールを示すことで相手意識をもち、分かりやすく書こうという児童の意欲につながります。子どもたちが作るこのような作品は、次年度以降の指導にも活用することができる大切な図書資料です。

〈資料の選定〉ここでは児童の実態を考慮して、図鑑ではなく、より教材文の書き方に近い説明文形式で書かれた資料を学校司書と連携して指導者側で用意しています。図書資料の選定はすべて学校司書にお任せするのではなく、児童の力に合ったもの、ねらいの達成にふさわしいものという視点で、選定の基準を指導者がもっておくことが大切です。

学習活動・内容	支援 (○) と評価 (※)
1 前時までの学習を振り返る 2 本時のめあてを確認する 3 本から必要な情報を探し、メモする方法を振り返る。 4 前時に付箋を貼ったページを読み、必要な情報を探し、ワークシートにメモする。	○「ふしぎ虫ずかん」をつくること、友達や全校のみんなにも読んでもらうことを伝え、意欲を高める。 ○文を指で追ったり、小さく音読しながら読んだりすること、メモは必要な情報を短く書くことなど、全体で確認する。 ○一人で読むのが難しい児童は学校司書が途中まで一緒に読むなどして支援する。 ○教材文を読み取る際に使用したワークシートと同じものを使い、メモをしやすいようにする。 ※本から必要な情報を探し、大切な言葉を考えながら表にまとめている (ワークシート) ○調べたことを何人か発表させ、交流する。 ○次時は「ふしぎ虫ずかん」をつくることを伝える。

〈情報の取り出し〉いきなり個別の調べ学習に入るのではなく、図書資料を拡大したものなどを使い、まずは学級全体で情報を取り出しまとめる方法をシミュレーションします。このような方法で、児童のつまずきを予測してあらかじめ確認しておいたり、思考の流れにそって手順を示しておいたりすることで、児童は見通しをもって主体的に活動することができます。

これらは事例の一部ですが、習得した知識や技能を活用しながら児童生徒の主体的な学習を促すに当たって、学校図書館の活用は不可欠なものです。学校図書館の機能を大いに活用して、司書教諭や学校司書等とも連携しながら、児童生徒が学ぶ喜びを実感できるような授業づくりを目指しましょう。

【参考資料】

<p>小学校 低学年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主語と述語（例えば、性質、状態、関係など）を明確にして表現する。 ・比較の視点（例えば、大きさ、色、形、位置など）を明確にして表現する。 ・判断と理由の関係を明確にして表現する。 ・時系列（例えば、まず、次に、そして、など）で表現できる。 ・互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合う。 ・書いた物を読み合い、よいところを見付けて感想を伝え合う。 ・文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合う。
<p>小学校 中学年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・判断と根拠、結果と原因の関係を明確にして表現する。 ・条件文（例えば、「もし、〇〇〇ならば、△△△である」）で表現する。 ・科学用語や概念を用いて表現する。 ・互いの考えの共通点や相違点を整理し、司会者や提案者などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合う。 ・書いた物を発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合う。 ・文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付く。
<p>小学校 高学年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・演繹法や帰納法などの論理を用いて表現する。 ・規則性やきまりなどを用いて表現する。 ・互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合う。 ・書いた物を発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合う。 ・本や文章などを読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりする。
<p>中学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・帰納・類推、演繹などの推論を用いて、説明し伝え合う活動を行う。 ・日常生活の中で気付いた問題について、自分の意見をまとめ説得力ある発表をする。 ・社会生活の中から話題を決め、それぞれの視点や考えを明らかにし、資料などを活用して話し合う。 ・グループで協同的に問題を解決するため、学習の見通しを立てたり、調査や観察等の結果を分析し解釈したりする話し合いを行う。 ・新聞、読み物、統計その他の資料を基に、根拠に基づいて考えをまとめ報告書を作成する。 ・実験や観察の結果、調査結果などを整理し重点化し、相手に分かりやすく、ポスターやプレゼンテーション資料などに表現する。 ・テーマを決めて複数の本や資料などを読み、内容を比較したり、批判的に捉えたりするなど、知識や考えを深める。
<p>高等 学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現代の社会生活で必要とされる実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合う。 ・文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて取捨選択してまとめる。 ・授業のまとめとして、その時間のポイントなどを説明する。 ・課題についての自分の考え方を板書し、どのようにすればよりよい考えや表現になるかを考える。 ・適切な主題を設定し、資料を活用して探求し、考えを論述する。 ・観察、実験などの結果を分析し解釈して自らの考えを導き出し、表現する。 ・学習の成果を互いに伝え合ったり、助言し合ったりして、新たな追及に向かう。

* [言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～
【小学校版】【中学校版】【高等学校版】（文部科学省）] より抜粋

引用文献・参考文献

- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説』（２００８）
- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説』（２００８）
- 文部科学省 『高等学校学習指導要領解説』（２００９）
- 文部科学省 『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～』【小学校版】【中学校版】【高等学校版】
(２０１０・２０１１・２０１２)
- 文部科学省 読解力向上に関する指導資料(平成１７年１２月)－PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向－ ２調査結果の概要(２)読解プロセス・出題形式からみた課題
- 文科省ホームページ「学校図書館」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/08092920/1282744.htm
- 学校教育法第３０条第２項
- 中央教育審議会 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)(２００８)
- 国立教育政策研究所 平成１５年度小・中学校教育課程実施状況調査結果の教科別分析と改善点
- 国立教育政策研究所 平成１９年度全国学力・学習状況調査結果のポイント
- 国立教育政策研究所 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料
(２０１１)
- 平成２３年度島根県学力調査報告書
- 初等教育資料 平成２３年６月号、７月号(東洋館出版社)
- 中等教育資料 平成２３年７月号、平成２４年１２月号(ぎょうせい)
- 研修講師となるために１ 言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫
独立行政法人教員研修センター(２０１０)
- 新しい教育課程における言語活動の充実 財団法人学校教育研究所編
学校図書(２０１０)
- 学校図書館の活用名人になる 全国学校図書館協議会編 国土社(２０１０)
- 子どもの学力を高める学校図書館の教科別活用法 押上武文・小川哲男編著 学事出版(２００４)
- 言語活動サポートブック くりかえし指導したい４４の言語活動 横浜市教育委員会編著 時事通信社(２０１２)
- 発想が広がり思考が深まるこれからの理科授業～言語活動を重視した授業づくり～中学校 田代直幸・山口晃弘編著 東洋館出版社(２０１０)
- 理科における言語活動の充実 村山哲哉・日置久光編著 東洋館出版社
(２０１０)
- 言語活動は授業をどう変えるかー考え方と実践のヒントー 北俊夫 ㈱文溪堂
(２０１１)
- 言語活動モデル事例集 水戸部修治 教育開発研究所(２０１１)
- 使える授業ベーシックー各教科・領域で言語活動を充実させるー 白石範孝 他
学事出版株式会社(２００９)

- 教科調査官が語るこれからの授業 小学校 水戸部修治・澤井陽介・笠井健一・村山哲哉・直山木綿子・杉田洋 (株)図書文化社(2012)
- 各教科等における言語活動の充実―その方策と実践事例― 高木展郎 教育開発研究所(2008)
- 新しい教育課程における言語活動の充実 財団法人 学校教育研究所 学校図書株式会社(2010)
- 各教科等における言語活動の充実―その方策と実践事例― 教育開発研究所(2008)
- 書く力を高める 小学校「100マス作文」入門 三谷祐児 明治図書(2007)
- すべての教師のための授業改善ハンドブック 北九州市立教育センター(2012)
- 児童のワークシート (協力校) 奥出雲町立馬木小学校
- 学校図書館を活用した授業展開 (協力校) 江津市立桜江小学校
- 「話し合う力」を育てるための系統表、「話し合う力」を育てるための指導の流れ (協力校) 松江市立大庭小学校
- 家庭学習の手引き (協力校) 浜田市立周布小学校
- 「食生活の課題と実践」の学習活動 (協力校) 出雲市立河南中学校
- 学習評価を生かした授業改善、授業づくりのためのハンドブック[中学校] 島根県教育委員会(2012)
- 学習指導の基本を身に付けよう 授業づくりQ&A～「よい授業」を目指して～ 島根県教育センター浜田教育センター(2011)

おわりに

「言語活動の充実」は、今回の学習指導要領の改訂において示された各教科等を貫く学習活動の重要な視点です。

日々実践されている各教科等の学習においては、それぞれの目標と固有の内容があります。「言語活動の充実」を進めることは、児童生徒が自ら課題を設定し、思考したり判断したりする中で、それらを解決していく力を育むことにほかありません。

本書は、日々の実践に取り組んでおられる県内の先生方にとって、言語活動の一層の充実を図るための一助となり、授業改善のための有益な情報となることを念頭に作成しました。作成に当たってはスタッフ間で協議を重ね、伝えたいことを精選し、そのエキスとなる部分を掲載していますが、言語活動の充実を図るためのポイントはまだ多く存在し、これら全てを伝えることの難しさを実感しました。

内容については、本県にうかがえる課題に対応させ、また、できるだけ分かりやすい内容にしていますが、様々な実態に当てはまらなかったり、取り上げた内容以外の課題に直面したりする場合もあるかもしれません。不十分な点は各学校において補っていただきますようお願いいたします。

本書が各学校や多くの先生方のお役に立ち、本県の子どもたちのよりよい成長につながることを期待しています。

島根県教育センター 浜田教育センター 研究・研修スタッフ

企画幹 石田 浩一

指導主事 小田 公弘 金山 悟

橋本 景子 澄川 由紀

福田 由紀

言語活動の充実Q&A

平成25年3月31日発行

編集兼発行人 島根県教育センター浜田教育センター
センター長 三島 修治

発行所 島根県浜田市長沢町1550-1
島根県教育センター浜田教育センター
Tel 0855-23-6782

印刷 柏村印刷株式会社
